
バカとテストと疫病神

ラーカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと疫病神

【Nコード】

N1263Y

【作者名】

ラーカー

【あらすじ】

疫病神と呼ばれ、敵にまわしたら、さまざまな手段を使い災厄を撒き散らすとされ、なかなか人と仲良くなることの少ない山本総司は、振り分け試験を受けらなかつたがゆえに、Fクラスに入る事に。そこでの個性的なクラスメイトとどう過ごすのか？

バカテスの二次です。作者は文才がなく行き当たりばつたりなので批評やアドバイスなどをお待ちしています。因みに更新は不定期です。

感想とか貰うと作者は喜ぶので、出来れば感想、指摘等お願いしま

す。

始まる前（前書き）

それじゃ、始まり始まりってか？

始まる前

うざいくらいに澄み渡った空を眺めながら、僕こと山本総司やまもとそうじは他の学生に混じって、ゆっくり登校している。

「世界って、なんか嫌いだな……」

この考えは人それぞれなので、意見は受け付けない。

「おい、山本」

横から、西村先生こと鉄人が声をかけてきたが、無視して歩き続け――

「無視をするな」

られるはずもなく、あっさりと襟首を掴まれて、引き戻される。

「おはようございます」

「人を無視した後に、爽やかに挨拶をするな」

じゃあどうしろと？

「鉄人先生、なにか用ですか？」

それはともかく、西村先生に用を尋ねると、頭を抑えて、

「……面と向かって、鉄人と呼ぶのは、お前と坂本くらいだな。用はこれだ」

そう言つて、箱から封筒を取り出し、僕の前に差し出した。

「あ、クラス編成の発表ですか」

そう言いながら受け取る。

クラスのめぼしは付いているのが、一応、封筒を破つて確認する。

「うん。予想通り」

そこには、でかでかと

『Fクラス』

と書かれていた。

ちよつと事情があり、振り分け試験に出ていないため、点数がリセ
ットされ0点なのだ。

「山本」

「何ですか？」

「この結果だが、お前が振り分け試験に出ていたら、CまたはBク
ラスには入れた筈だ。……なぜ休んだ？」

そう言えば、無断欠席だったけ？

そんな事を思い出しながら、いう。

「忘れてました」

それを聞いて、呆れ顔の鉄人先生を無視して、教室へ向かう。

「Fクラスか……。楽しめるといいけど」

その呟きが聞こえたのか、近くの生徒が嫌そうな顔をして、離れて行った。

始まる前（後書き）

感想など、お待ちしております。

キャラ設定（前書き）

オリキャラがでる度に更新します

キャラ設定

やまもと そうじ
山本総司

男

17歳

家族構成

オカマ
父親と姉の3人家族

見た目

濁った感じの茶髪で、顔立ちはやや整っている。身長は175cmくらいで、身体は無駄な脂肪が付いていない。

面白そうな事には、首を突っ込んで引っ掻き回し、飽きたらそのまま放置するような、根っからの快樂主義者。
頭はいい方だが古典の成績は壊滅的。得意科目は数学で腕輪持ち

召還獣

見た目は格闘家のような姿

武器は腕に巻き付けている鎖で、基本的に振り回して戦うが、別に接近戦が弱いわけではなく、むしろかなり強い

腕輪の効果は【自爆】で400点を消費して、フィールドの召還獣すべてを一掃する。

因みに自分は生き残る。

キャラ設定（後書き）

こんな所かな

はじめましてFクラス（前書き）

それじゃ始まり始まりってか？

はじめましてFクラス

「……………ボロいな」

クラスに入る前の、いや旧校舎に入ってから感想を呟きながら、我がFクラスの前に立つ。

「おはようございます」

そう言いながら、教室に入ると、Fクラス全員の視線が突き刺さる。

その無遠慮な視線は、主に男子生徒から……………って男しくないじゃないか！

「おい、お前」

教室の前で、クラスメイトの男女率の偏りに驚いていると、教壇に仁王立ちする185cmくらいのたてがみのような髪をした男子生徒が声をかけてきた。

「おはよう。え〜と誰だっけ？」

割と有名人だった気がするが関わりがないため、あまり覚えていない。

「代表の坂本雄二だ。教室の前で立ち尽くすな、邪魔だからな。席は自由だから好きな席に座っておけ」

「はいよ〜」

適当に返しながら席、というより卓袱台（正確には座布団かな？）に適当に座る事にする。

「おはようじゃ」

「うん？」

座るとすぐに隣の席の美少女が話かけてきた。

「あ、女の子いた」

女の子はいないかと思ったがどうやら早とちりだったらしい。良かった良かった。

「わしは男じゃ！」

……………は？

「いまなんと？」

なんか男と聞こえた気が…………

「わしは男じゃと言ったのじゃ」

なん……………だ……………と！？？

「そこまで驚かんでも…………。まあ、気持ちにはわからんでもないが……………」

う、嘘だろ…………

「爺言葉で話しているだ！？」

「そこは驚く所ではないぞい！！！！？」

うん、いいツツコミだ。

「冗談だ。僕は山本総司だ。よろしくね」

「いや、本気に見えたぞい……。気を取り直して、わしは木下秀吉じゃ。こちらこそよろしくお願いするぞい」

ニコツと笑った顔にグラツときたが、精神力で持ち直す。あ、危なかった。危うく惚れてしまう所だった。

後ろでカメラを構えているバカを無視して、秀吉（どうやら本当に男らしい）としばし、雑談をする。

始めからいい感じに話し相手が出来たし、退屈するかもしれないが、悪くない学園生活が送れそうだ。

ガラッ

『早く座れ、このウジ虫野郎』

前言撤回、退屈しない学園生活が送れそうだ（笑）

はじめましてFクラス（後書き）

雄二・秀吉登場。

次回は観察^{バカ}処分者登場

批評や感想、アドバイスなどよろしくお願いします。

後の祭り（前書き）

始めます

後の祭り

「ウジ虫野郎って（笑）」

坂本の台詞に笑いをこらえていると、秀吉が

「あやつらは本当に相変わらずじゃのう」

「？ 秀吉ってあいつらの知り合いか？」

秀吉の台詞を聞いて、教壇で話し合っている二人を一瞥しながら、
気になったことを訊く

「去年は同じクラスでのう。あやつらは友人じゃ。……………そこで
カメラを構えておるのも友人じゃ」

そこでカメラのシャッターをきっているバカを指す。

「さつきから無視してたが、お前はなんなんだ？」

「……………なんだかんだと言われたら「それ以上言ったらカメラ破壊
するぞ」……………冗談」

まったく、国民的キャラのボケをかますとは、予想外だったぞ。

「…………改めて、土屋康太。……………よろしくな山本」

「名乗ったっけ？」

「…………さっきの自己紹介を聞いた」

「あつそ。総司でいい。僕も康太と呼ぶから」

「…………わかった。よろしく総司」

「こちらこそ」

康太との自己紹介（？）が終わると、おそらく担任であろつ冴えない風体のおじさんが教室に入ってきた。

それで前で話し合っていた二人もそこら辺の席（？）につく。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎ふくはらしんです。よろしくお願いします」

そう言つて名前を黒板に書こうとして止めた。どうやらチョークがなかったらしい。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出て下さい」

ここの設備は卓袱台と座布団と畳。……………斬新な設備だな……………。

『せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってません』

「我慢してください」

『先生、俺の卓袱台の脚が折れています』

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

『せんせー、窓が割れていて風が寒いんですけど』

「ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきます」

扱いに差があるとは聞いていたが、Fクラス《最低辺》になるとこんな感じなのか…………

「必要なものがあれば極力自分で調達してください」

「……………真面目に振り分け試験に出ていたら良かった」

今更言つても完全に後の祭りである。

後の祭り（後書き）

感想や評価などお待ちしています。

火蓋は切って落とされた（前書き）

いつの間にかユニーク1000を超えている……

やった（小さくガッツポーズ）

火蓋は切って落とされた

「では、自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします」

たいして興味がなかったので、聞き流していくと自分の番になったので、立ち上がって自己紹介をする。

「山本総司だ。趣味は家事全般。嫌いな事は退屈とつくもの。一年よろしく」

そう言つて、さつさと座る。

……………座る時に坂本がニヤリと笑ったのが気になった。

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』と読んで下さい」

さつき坂本と話していたバカ面が、なんというかバカな事を言ったのが、耳に入った。

『『『ダアアーリーーン!!』『』『』』

どうやらこのクラスはかなりノリがいいらしい。

「失礼。忘れて下さい」

忘れるわけがない。

「とにかくよろしくお願い致します」

引きつった作り笑いを浮かべながら、吉井が席に着く。

不意にガラッと教室のドアが開き、一人の美少女が現れた。

「ちようどよかったです。今自己紹介をしている所なので姫路さん
もお願いします」

先生がサラッと遅刻してきた美少女に自己紹介を促す。

「は、はい！姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……」

やはり姫路さんか、確か彼女は去年の学年次席だったはず。学力的
には間違はなくAクラスに入る彼女がなぜFクラスに？

『はいっ！質問です！なんでここにいますか？』

ナイスだ。生徒A。しかし、いきなり失礼だろそれ。

「そ、その振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

ああ、なるほど。確か試験途中の退席や試験に欠席すると全科目0
点となるんだっけ？ということは彼女は僕と同じ点数というわけだ
な。妙に親近感が湧く。

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

僕の知り合いは簡単すぎたって言ってたぞ？

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて』

『黙れ一人っ子』

嘘つくなよ

『前の晚彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

流石Fクラス。バカばかりだ。

「では、一年よろしく願います!」

そう言つて、姫路さんは空いてる席へ向かう。

後で話し掛けるか。そう思い唐突に襲いかかってきた睡魔によって意識を手放した。

『『『大ありじゃあっ!!』』』

「うおっ!?!」

寝ていたら、魂の叫びに叩き起こされる。

「ひ、秀吉。一体何が……？」

比較的に冷静そうな秀吉に現在の状況を尋ねる。

『だろう？俺だってこの現状はおおいに不満だ。代表として問題意識を抱いている』

「なんと言つべきかのう？」

『いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ！改善を要求する』

「わかる範囲でいい」

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりにも差が大きすぎる！』

「なんとか雄二のせいじゃ」

『そうだそうだ！！』

「なるほどなんか納得した」

なにかやらかしそうな雰囲気を出してからな。

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表の坂本が戦争の引き金を引いた。しばらく楽しめそう
だ。

.....敗北へのフラグに聞こえるのは僕だけなのかな？

火蓋は切って落とされた（後書き）

感想や評価、アドバイスなどよろしくお願いします！

戦力確認は大事です（前書き）

なんか昨日だけでユニーク1000を超えているんだが………

………まじで？

戦力確認は大事です

『勝てる筈がない』

『これ以上設備を落とされるなんて……嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいららない』

Aクラスへの宣戦布告。それを聞いたFクラスのだいたいの反応である。……最後のは違うか。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせてみせる」

そう言うからにはなにか根拠があるのだろう。

『なにを馬鹿なことを』

そう決め付けるのは早いぞ？

『できるわけないだろ』

やってみないとわからない

『何の根拠があるんだ？』

お、普通に冷静な奴もいるな。

「根拠ならある。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。それを今から説明してやる」

Fクラスだぜ？学年最下位クラスにそんな要素あるか？

「おい、康太。畳に顔つけて姫路のスカートを覗いてないで前にこい」

「……！！（ブンブン）」

恥も外聞もなく覗いてたくせに、顔と手を左右に振り否定するなよ。

「土屋康太。こいつは寡黙なる性職者だ」
ムツツリーニ

ムツツリーニって、たしか男子には畏怖と畏敬を、女子に軽蔑を持つてあげられるムツツリスケベじゃなかったっけ？

『ムツツリーニだと？』『ヤツがそうだというのか！？』

『だがみる。あそこまで明らかな覗きの証拠を隠そうとしているぞ』
『ムツツリの名に恥じない姿だ』

お前らどこに感心しているんだ？

「????」

姫路さんは頭に多くの疑問符を浮かべているが、これは知らない方がいいだろう。

「姫路のことは説明するまでもないだろ。皆もその力はよく知っているはずだ」

元学年次席だからな、有名だろう。

「わ、私ですか？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

『俺たちには姫路さんがいるんだ！！』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

だれだ？姫路さんにラブコールを送ってるのは？

「木下秀吉だっている」

え？秀吉って有名なの？

『おお……！』

『アイツ確か、木下優子の……』

横目で秀吉を見ると、満更でも無さそうだった。

「当然俺も全力を尽くす」

坂本が自信満々に胸をはる。

『坂本って、小学生の時は神童とか言われてなかったか？』

『じゃあ、振り分け試験の時は体調不良だったのか』

『実力はAクラスが二人もいるってことだな！』

坂本が神童って呼ばれたのは何年も前だから信用出来ないと思うがなあ。

「それに俺にこの事を言い出すきっかけになった奴もいる」

『なんだと……？』

『坂本を踏み切らせた奴だと……？』

『だれだ……？』

坂本の言葉に吉井がなんか騒ぎ出したが、な〜んか嫌な予感が……

「そいつは、『疫病神』こと、山本総司だー!!」

『『『『な、なにiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!!!!!?????????』』』』

あゝあ、言っちゃったぜ

『疫病神が味方だと……!!』

『なんて心強い……!!』

『俺たちの勝ちが決まったな』

いや、そんな訳ないだろ。

ここでの『疫病神』は普通とは意味が違う。

僕を指す『疫病神』は味方また中立なら害はないが、敵に回ったらさまざまな手段を使い敵を根絶やしにするという噂が流れているんだ。

実際はそこまでひどくはない。

「坂本、勝手に戦略兵器扱いするな」

「……試験召喚戦争に参加しないのか？」

クラス中の視線を感じながら、適当に嘯く。

「まあ、この環境はあれだからね。手伝うくらいはするよ」

とりあえずの参加の意志それにクラスは一斉に盛り上がる。

『いよつしゃあああああ！！』

『勝てる勝てるぞお！！』 『俺たちの天下だ！！』

『俺のモテモテライフの始まりだぁー！！！！』

喜ぶのは早すぎるだろ。最後のに至っては関係ないし。

僕の呆れをよそに、我がFクラスのボルテージは最大まで上がり

「それに吉井明久もいる」

シーン

ゼロに還った。

「雄二！僕の名前を挙げる必要はないよね！？」

「オチなんだろ」

『吉井って誰だ？』

『聞いたことないぞ』

さっき自己紹介してだろ？

「折角上がった土気に翳りが見えてるし、ーなんて僕を睨み付けるの！？」

こいつ割と面白いな。玩具に決定。

「知らないなら教えてやる。こいつは『観察処分者』だ」

『それってバカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、ちが「そうだバカの代名詞だ」肯定すりなバカ雄二！」

僕は横目で坂本が姫路に観察処分者のことを教えているのを見ながら吉井の肩に手を乗せ、

「ドンマイ、観察処分者『バカ久』」

最高の笑顔とともに毒を吐いた。

その結果、バカは教室の隅でいじけてしまった。なんでだろ？

「お主も酷いの……」

「……かわいそう」

外野が五月蠅いから無視しよう。

「とにかく、俺たちの力の証明として、Dクラスを征服する」

「へー」

「皆、この境遇は不満だろ？」

『当然だ！ー！』

ほぼ自業自得だろ。

「ならば全員ペンを執れ！」

『おおー！！』

「俺たちに必要なものはなんだ？」

『『『Aクラスのシステムデスクだ！！』』』

Fクラス男子（隅にいるバカを除く）が拳を高く掲げた

クラスの雰囲気には圧されたのか、姫路さんは小さく拳を掲げた。

別に無理に合わせなくてもいいのにね。

戦力確認は大事です（後書き）

感想や評価、アドバイスなどお待ち致します

宣戦布告と死亡フラグ（前書き）

始まります

宣戦布告と死亡フラグ

「明久、隅っこで落ち込んでないでこっちにこい」

しぶしぶといった感じに明久が戻ってくる。

「なに雄二？」

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になってもらう」

「今、字が違わなかったかの？」

「気のせいだ」

秀吉の台詞に坂本が断言する。気のせいかな？

「……下位勢力の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

「それは実際の戦争だけだぞ？戦争とはいえ、ここは学校だぞ？そんな事がある訳ないだろ」

「山本の言う通りだ。騙されたと思って行ってみろ」

吉井は僕と坂本の台詞を反芻しているようではらくブツブツ言ってたが、やがて顔を上げて聞く。

「本当「もちろんだ。俺を誰だと思っている」……………わかった行ってくる」

坂本が力強く断言し、それを信じて吉井はDクラスへ向かった。

「坂本、お前わかって送り出したな？」

「当たり前だ」

坂本への僕の確認をすると予想通りの答えが返ってきた。

「何のことじゃ？」

秀吉が疑問に思ったのか、聞いてくる。

「ああ、明久が酷い目に遭うのがわかってて行かせたってわけだ」
「酷いのじゃ」

「ああ、さっきは援護、ありがとな山本」

「総司でいい。僕は一般論を言っただけだよ坂本」

「雄二でいい、これからもよろしくな」

「ああ、よろしく」

雄二と堅い友情の握手をする。いい友達に成れそうだ。

「最低の友情じゃの……」

「……………外道」

そんな事実はない。

雄二とDクラスにどう攻めるか議論していると

「騙されたあつ！」

命からがらといった様子で吉井が教室に転がり込んできた。

「やはりそうきたか」

流石雄二、平然と言い放った。

「大丈夫か吉井？」

「大丈夫じゃない、やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか二人とも！」

「当然だ。予想出来ないで代表が務まるか」

「二人とも少しは悪びれられろ！」

なぜ僕まで、ちょっとからかうか。

「吉井、僕はこれは予想外だったんだぞ？（もっと酷くなると思ってたからな）」

「え？そうなの？」

「ああ。吉井に（こんなに軽い）暴行するとは思わなかった」

「ごめん。山本君。さっきは怒鳴って」

「総司でいい。構わないよ吉井。お互いに誤解があったようだからな」

「明久でいいよ」

「わかった。明久だな？これからも（玩具として）よろしく」
「よろしく総司」

明久との友情が結ばれた。

「卑怯じゃ……」

「……外道」
「ナイスだ」

外野は黙れ♪

「吉井君、大丈夫ですか？」

姫路さんが吉井に声をかける。

「あ、大丈夫。ほとんどかすり傷」
「ちっ」

吉井の台詞に思わず舌打ちがでた。

「いま舌打ちしたのは誰だ！というか雄二貴様だろ！」
「吉井、大丈夫？」

空気を読まずに島田が吉井に話し掛ける。

「あ、うん。平気だよ」「良かった。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

ヒューヒュー、明久くんモツテモテ♪

「だめだ！もう死にそう！」

明久が床で転げ回る。うわー、目障りだ！。

「バカはほつといて、今からミーティング行っぞ」

雄二が扉を開けて外に出たので、吉井を踏み越えて「グハア！？」
ついて行く。

雄二を先頭に屋上にでた僕らはDクラス戦へのミーティングをしていた。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど」

「じゃあ、先に昼飯か」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいまともなもの食えよ？」

うん？明久は昼飯食わないタイプなのか？

「なら、パンでも奢ってよ」

「え？吉井君はお昼食べないひとなんですか？」

姫路さんも同じことを思ったらしい。

「いや、食べてるよ」

「……あれは食べてるとはいわん」

「どうゆうこと？」

「こいつの主食は――水と塩だから……」

「うわぁー」

流石の僕もドン引きした

「失礼な。きちんと砂糖だって食べてるさ！」

「水と塩と砂糖は食べるとは言いませんよ……」 「舐めるが表現として正解じゃろうな」

「……よく生きてる」

「同感だ」

「飯代まで遊びに使い込むお前が悪いな」

「自業自得かよ」

「仕送りが少ないんだよ！」

いや、おまえの自業自得だ。

「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

「え？本当にいいの？」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「……ふーん。瑞希って優しいのね。吉井だけに作ってくるなんて」

姫路さんの台詞に面白くなさそうに言ったのは島田だ。

どうやらこの二人は明久にホの字らしい。

「あ、皆さんにも……」「俺たちも？」

「ゴチになりまゝす」

「それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「お手並み拝見ね」

姫路さんのお弁当が楽しみだな。

あれ？なんか明久がアホな顔してる。

「姫路さん、僕、初めて会っ前から君のこと好きー」「振られたら弁当の話はなくなるな（ボソッ）」「ーにしたいと思ってました」

明久は変態だった！！

宣戦布告と死亡フラグ（後書き）

いきなりですがオリキャラを募集します。

名前

性別

ビジュアル

性格

その他

この順番で書いてください。

期限は特にありません。

オリキャラは使えそうだったら使います。

皆さん、よろしく願います。

花より団子（色気より食い気ともいう）

前回のあらすじ

吉井「僕は姫路さんのことを好きにしたいと思ってます」

「明久。本人の前でよく言えたな」

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

「僕の判断力のバカーーーーーー!!」

明久は空に叫んだが、よく見る明久。姫路さんはなんか「吉井君に求められ……はわっ（ノノノ）」

……なんか頬を赤らめているよ？それに若干取り返しがつかなそうだな。

「お前はたまに俺の想像を超えた人間になるよな」

「だって……お弁当が……」

「花より団子。色気より食い気かよ……」

こいつ本当に馬鹿だな。

「話が「明久のせいで」逸れたな。試験召喚戦争に戻ろう」

「ちょっと、総司！？なんでそこで僕の名前を出すのさ！？」
「事実だろ」

「雄二。どうしてDクラスなんじゃ？段階を踏むならEクラスじゃし、勝負に出るならAクラスじゃろ？」

「確かにそうですね」

「当然理由はある」

明久が？飛ばしてる。もうついてこれないらしい。

「どんな理由ですか？」

「姫路さん。よく考えてみなよ」

「総司それじゃわからないぞ。まあ、Eクラスと戦わないのは簡単だ。戦うまでも無いからな」

「えっ？でも僕らよりクラスは上だよ？」

確かに成績順にクラス分けをしているから振り分け試験の時はずえだっただろう。

「明久。オマエの周りにいる面子をよく見ろ」

明久がメンバーを見回す。

「えーっと、美少女二人と馬鹿が二人とムツツリが一人と常識人が一人いるね」

「誰か美少女だと！？」

「雄二が美少女に反応するの！？」

「……………（ポツ）」

「ムツツリーニまで！？」「だ・れ・がムツツリだと？」

「総司まで！？どうしよう、突っ込み切れない！」

人をムツツリ扱いするなら、それ相応の罰を与えよう。

「落ち着くのじゃ、代表にムツツリー二に総司よ」

「そ、そうだな」

「明久あとで覚えとけ」

「なんで！？なんで総司の怒りを買ってるの！？」

「ま、要するに。姫路と総司に問題がない以上、Eクラスには勝てる」

「？それならDクラスとは正面からぶつかるど厳しいの？」

明久はよくわかって無いらしい。

「明久。試召戦争は成績と戦略がものを言う。ここまではいいな？」
「うん」

「僕と姫路さんは万全な状態なら力押しでなんとかなるが、お前らは違うだろ？」

「あ、そっか。僕達は成績的に負けてるから……」

「そういうこと」

「って総司って成績いいの！？」

なんだこいつはいきなり。

「基本的に総合は2500ちょいだな」

「Bクラス上位からAクラス下位くらいか」

まあ、そんなもんだな。

「振り分け試験受けてたら、Bクラス代表になってたかも知れない

のか……」

雄二が良かったという顔をしている。どんだけ敵にまわしたくなかったんだよ。

「それじゃ、雄二作戦の方をよろしく」

「お前は？」

「今回は補給にまわっておく。振り分け受けてないし」
「そうか」

僕はニヤツと笑う。

「このクラスは強いぜ」

「そうなの？坂本？」

「ああ、いいかお前ら。ウチのクラスはー最強だ」

「いいわね。面白そうじゃない」

「退屈しなさそうだな」

「……………（グッ）」

「Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」
「頑張ります」

はは。いい感じだ。

「それじゃ、作戦を説明しよう」

屋上で、勝利のための作戦に耳を傾けた。

これから楽しくなりそうだ

花より団子（色気より食い気ともいう）（後書き）

まだまだオリキャラ募集中

Dクラス戦開幕（前書き）

主人公あまり出ません。

Dクラス戦開幕

前回のあらすじ

秀吉「Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

こんにちは。只今、化学の補給試験中の山本君です。

今はDクラス戦何だけど、僕は点数がないから参加出来ないんだ。

「次、お願いします」

三つ離れた席で姫路さんも補給試験中です。

……姫路さんの解くスピードが異常なんですが？

僕が今1枚目なのに、彼女に至っては3枚目だよ？おかしくない？

さっさと終わらして、試召戦争に参加したい！！

side 明久

「木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」
ポニーテールを揺らしながらかけて来たのは副部隊長の島田さんだ
(ちなみに部隊長は僕になっている)。島田さんに何か足りない
気がする。

何が足りないのだろうか？

「ああ、胸か」

「小指から順番にアンタの指を折るわ」

マズい。何かのスイッチに触れたっぽい。

「そ、それより今の状況は！？」

「今は……」

そう言つて、島田さんは渡り廊下の方を見る。どうやら誤魔化せたようだ。

さてと今の状況は……？

『さあ来い！負け犬が！』

『鉄人！？補習室は嫌なんだ！』

『黙れ！捕虜は全員この試召戦争が終わるまで補習室で特別講義だ！』

『見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない』

『拷問？これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味は勉強、尊敬するのは二宮金次郎という理想的な生徒になるだろ』

『鬼だ！誰かたーイヤアアー（ボタン、ガチャ）』

なるほどよくわかった。

「島田さん、中堅部隊に通達」

「作戦？なんて伝えるの？」

「総員退^{グサッ}」

チヨキで殴られた。

「目があつー！」

「目を覚ましなさい、この馬鹿！部隊長が臆病風に吹かれてどうするのよ！」

その台詞はグーかパーで殴った後に言つて欲しかった。

「吉井、ウチらの役割は木下の前線部隊の援護でしょう？アイツら

が消費した点数を補給する間はウチらが前線を「島田、吉井前線部隊が撤退を開始したぞ！」――総員退避よ」

途中で言ってる事が変わってる。

「吉井、総員退避で問題ないわね？」

「うん。僕らには荷が重すぎた」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ」

Fクラスに方向転換。

するとそこには本陣に配属された横田君がいた。

「？横田じゃない。どうしたの？」

「代表と山本殿より伝令があります」

どうでもいいけど山本殿なんだ。

「まずは代表から『逃げたらクロス』」

ア、アハハハハ。クロスって、そんなわけ……。

「山本殿からは『逃げてもいいよ』」

総司君はなんて優しいんだ！

「まだ続きます『メイド服かナース服のどちらかのコスプレかを選ぶ権利位はあるから』」

「全員突撃しろぉーっ！」

気がついたら戦場に向かってダッシュしていた。

これはFクラスの勝利のためだ！

「お？」

今微かに明久の叫びが聞こえた。

どうやら横田君からのメッセージを受けたみたいだ。

「さっさと終わらせますか」

そう呟きながら、問題を解いて行く。

一時間くらいで合流できるかな？

Dクラス戦開幕（後書き）

まだまだオリキャラ募集中。

喰らえ、ライダーパンチ！！（前書き）

タイトルがあれだね……

喰らえ、ライダーパンチ！！

前回のあらすじ

島田「目を覚まさない、この馬鹿！」

どうも、やっと補給試験が終わって、戦場に出てこれた山本君だよ？

いやー、意外と補給に時間がかかって、困ったことに、もうすぐ放課後なんだよなー。

まだ一回も戦ってないから、早く戦いたいなー。

そんな事を考えながら、教室に戻ると、

「やれる、僕なら殺れる」

「殺るなっの」

.....。

「えーっと、どんな状況？」

なにがなんだかわからない。

なぜか明久が包丁と靴下（砂が入ってるぽい）を持ってハアハア言ってる。

「雄二何があった」

「ん？総司か。いや明久が放送を頼んださいに俺が明久が船越先生にラブコールを送ったことしただけだ」

ああ、なるほど。船越先生（婚期逃した独身女性）に明久が告白したことになるのか。

「シャアアアッ！」

明久が鋭く踏み込みコンパクトに雄二の肝臓へ包丁を突き出し、同時にブラックジャックもどきを雄二の頭へと――

「あ、船越先生」

その前に明久が掃除用具入れに飛び込んだ。

「馬鹿は放っておいて、決着つけるか」

「はいよー」

「……………（コクコク）」

「そうじゃな。下校しておる生徒も見え始めたし、頃合じやろっ」

「Dクラス代表の首を刈りに行くぞ！」

『おっっ！』

楽しい狩りの始まりだ。

「あー、明久。船越先生が来たっていうのは嘘だ」
「いや、そもそも来たなんて一言もいってないし」

明久にそう言つて、教室を出る。

すぐに渡り廊下で交戦に入つたので、すぐに戦うことになった。

適当な生徒に決闘^{けんか}を売る。

「Fクラス山本総司が日本史で勝負を挑む。試獣^{サモン}召喚」

「馬鹿が調子に乗るな。試獣^{サモン}召喚」

お互いに召喚獣が出て来る。

相手の召喚獣は軍服にサーベルという格好。

対する僕の召喚獣は流れ者の格闘家のような姿だった。

「馬鹿が勝てると思うなよ！」

そう叫びながら突っ込んで来たので、右に避けて拳を叩き込ませた。
が、倒せなかったようだ。

「なにいつ！」

「こんなもんか」

『Dクラス 斎藤雅人 VS Fクラス 山本総司
日本史 46点 VS 221点
』

思ったより今回は取れたんだよね。

「嘘だろ！？Fクラスかお前は！？」

「Fクラスだよ。不本意にもね」

そう言つて、召喚獣の腕に巻き付いていた鎖を振り回し、戦死させる。

「よわっ」

この結果から、驚異だと思ったのか相手の本陣の3人が一気に遅い掛かってきた。

「えいつ！（ヒョイ）」

「この！（スカ）」

「おら！（ヒョイ）」

三方向からの攻撃をメタル。ライムのごとく避け続ける。

『Fクラスの姫路瑞希です』

『えっ？』

向こうで終わりのフラグがたつたみたいだ。

すぐにDクラスの代表が討たれて、試召戦争は幕を閉じた。

あー、なんだか暴れ足りない。

→合計で10人を戦死させた人

喰らえ、ライダーパンチ！！（後書き）

オリキャラはまだまだ募集中です！

Dクラスとの戦後対談（前書き）

オリキャラ案がかなりバランスブレイクなんだが………

設定を弄って使うか。

それではどうぞ

Dクラスとの戦後対談

前回のあらすじ

姫路「Fクラスの姫路瑞希です。試獣召喚^{サモン}」

Dクラス代表 平賀源二 討死

その報せを聞いたFクラスの勝ち鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、うざったい大音響が校舎を駆け巡った。

「本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳と卓袱台ともおさらばだな」

「あれはDクラスの物になるからな」

「坂本サマサマだな!」「坂本万歳!」

「姫路さん愛してます!」

至る所から雄二を褒め称える声が聞こえる。

毎回思うが姫路さんにラブコール送っているの誰だ?

向こうで明久が雄二に包丁を突き出したが、あっさり手首を捻り上げられたようだ。

何やってんだよアイツら……。

あれは放っておいて、Dクラス代表の平賀源二の所へ行く。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん」

「振り分け試験中に高熱を出したんだってよ」

ブツブツ言っていた平賀に話かける。

「そうだったのか……。……君は?」

「僕はFクラスの山本総司だ。よろしく」

「山本君だね。なんの用だい?」

「あれも終わったから戦後対談するよ、って」

そう言っただけで雄二の方を指す。

「ああ、わかった」

平賀君が雄二のもとへ向かう後について行く。

「平賀、きたか」

「ああ、ルールに乗っ取ってクラスを明け渡そう。ただ「その必要はない」ーどということだい？」

「雄二なんで？」

「Dクラスを奪うつもりはないからだ」

「なんで？せつかくの普通の設備を手に入れることができたのに」

「明久、目標を忘れたのか？まあ、気持ちはわからんでもないが。まあ、雄二の次への布石だろ？」

ニヤツと笑いながら、話に混ざる。

「総司。よくわかったな？」

「明久じゃあるまいし「ちょっとどつということだよ！」ー明久黙れ。Bクラス戦の為だろ？」

「Bクラス……。ああ、Bクラスの室外機かな？」

平賀はそこそこ頭がまわるみたいだ。

「ああ、こちらの指示でアレを動かなくしてもらいたい」

「それだけかい？」

「ああ」

「……そうか。ではありがたくその提案を飲ませて貰う」

取引成立。チヨロいね。

「もし、破った場合『疫病神』が敵にまわるから気をつけろよ」

「待てゴラツ。勝手に僕を使うな！」

なぜかその言葉に明らかに平賀が引く。

「……す、すまない。君を敵にまわすつもりはなかったんだよ!」
「……平賀。こっちが仕掛けたんだから、謝らんでも」

明らかに腰が引ける。

「あー、約束は守ってね?」

「は、はい!」

そう言っつて、平賀君は去って行つた。

帰り道。僕と秀吉は方向が同じなので、一緒に帰る事になっている。
「それにしてもお主は凄かったのう」
「どこが?」

秀吉の凄かったの意味が分らず首をひねる。

「あの召喚獣の戦いじゃ」

「ああ、あれ」

秀吉が呆れたように言っつて、ようやく意味がわかる。

「なんで三方向から攻撃されて、ほぼ無傷だったのじゃ？しかも関係無い戦いの敵を倒せるのじゃ？」

「いや、あれの前にある程度、召喚獣の操作を把握したから、出来たんだよ。あと、最初のうちは、よけながら適当に鎖飛ばしたら敵当たったんだ」

「つまり途中から狙ってやったのじゃな……」

秀吉は敵でなくて良かったぞいと言って、安堵の息をはく。

ここで秀吉に前から気になっていた事を訊く。

「なあ、秀吉」

「なんじゃ？」

「なんでお前らは僕が『疫病神』だって知っても変わらずに接する事ができるんだ？」

僕は疫病神という渾名のせいで、まともな友人ができたことがない。

だからこそ、秀吉や雄二、明久、康太が変わらずに接することができのかがわからない。

「？そんな事決まっておるじゃろ」

「？」

「友達だからじゃ」

わしはこっちじゃからと言って、秀吉と別れた。

「友達か……」

秀吉が当たり前のように告げた言葉が、自然と口から漏れた。

「そう言ってくれて、ありがとう」

この日、僕は初めて嬉しさから泣いた。

Dクラスとの戦後対談 (後書き)

主人公…………… (p. 1)

オリキャラはまだまだ募集中です！

朝、新キャラ登場（前書き）

始まります

朝、新キャラ登場

前回のあらすじ

秀吉「友達だからじゃ」

「さぼるのかな？」

Dクラス戦から一夜明け、登校中にふと、思い立った。

今日は昨日のDクラス戦で減った点数の補給……………！ー 要するにテストである。

「まあ、ダメージまったくないから受けなくてもいいんだけどね……………」

……………。

あれ？行く意味無くない？

「……サボるか」

「サボっちゃダメだよ？」

「うえおっ！」

独り言に応えが返ってきたので、変な声が出た。

声が聞こえた方向を見ると、小柄で小動物のような女子高生がいた。

「ん？驚かすなよ瑠璃」

「驚かしてないんだけど……」

そこにいたのは、幼なじみのAクラスの秀才・川端瑠璃^{かわはたるり}がいた。

「なにがあつたのかわからないけど、サボっちゃダメだよ？」

「いや、今日は昨日の試召戦争のせいで補給試験受けなきゃいけないからさ」

おおざっぱに瑠璃に理由を話す。

「試召戦争？そういえば、総ちゃんはこの所属なの？」

また、痛いところを

「振り分けの時、いなかっただろ？」

「……………あ」

どうやら、忘れてたようだ。

「じゃあ、Fクラスなの？」

「そうなるね」

「総ちゃんなら、受けたらBクラスには入れたのに……」

あれ？振り分け出なかった理由言ってなかったっけ？

……まあいいや。

「じゃ、僕はこっちだから」

「あ、うん」

そう言いながら、瑠璃と別れる。

「おはよー」

『総員狙え！！』

ガラッ（ドアを閉める音）

シュカカカ（カッターが刺さる音）

「なんだよ？」

『黙れ異端者！』

『女子と登校などうらやまー許せない』

『異端者は死刑だ！』

『これより異端者を断罪する！』

『ヒヤアハアアア！！』

あー、なんのことかわからないが……

「僕に喧嘩売るなんていい度胸だね」

ストレス発散にちょっと 暴れますか。

朝、新キャラ登場（後書き）

次はキャラ紹介でもします。

オリキャラ募集中です。

キャラ紹介（川端瑠璃）（前書き）

このキャラは筆者の考えたものです。

キャラ紹介（川端瑠璃）

かわばたるり
川端瑠璃

女 16歳

見た目

髪型は三つ編みで、体格は小柄で小動物のような印象を受ける。

山本総司の幼なじみで総司を総ちゃんと呼ぶ（昔は総司は嫌がっていたが今は諦めた）。総司に恋愛感情を持っているが、自覚していないっぽい。

どんな科目もこなす秀才で得意な科目はないが英語が若干苦手（それでも300は越えている）。平均340総合で3500くらい。

召喚獣

狩人の女バージョンみたいなもの。武器は武骨なナイフ。

キャラ紹介（川端瑠璃）（後書き）

こんなもんかな？

送ってもらったオリキャラはBクラス戦あたりとAクラス戦で使う予定。

吉井の不幸（自業自得）（前書き）

ダリイ

吉井の不幸（自業自得）

前回のあらすじ

山本「ストレス発散にはちょうどいいや」

『異端者め……！我らは不滅だ………！』
「はい黙れ」

どうもクラスメイトのほとんどをを叩きのめした山本総司です。

「お前凄いな………」

なぜか引き気味に雄二が言う。

「いや、僕は喧嘩は得意じゃないけどね？」
「今のお主に説得力はないぞい」

近くにいた秀吉に突っ込まれた。よく見ると、前回の屋上組がよって来ていた。しかしな

「僕の戦いは情報戦だからな。喧嘩は基本的に人外と武芸者に任じてからなあ……」

「人外はともかく、武芸者ってのは誰だ？」

雄二が興味深そうに聞いてくる。しかし、人外の方を知っているのは意外だ。……なんか勘違いされているような気がするが放っておく。

「武芸者の方は、腐れ縁の一人で倉石黒夜だ。^{くらいしくろや}僕はクロって呼んでいる」

「ちょっと待て、そいつまさか『暗黒の暴君』^{ブラックキング}か!？」
「……………」
「……予想外!」

雄二と康太がなぜか驚いたように大声を上げる。

「なによそいつ?」

「ブラックキング?」

女子組は知らないっぽいな。

「『^{ブラックキング}暗黒の暴君』ってのは、一回キレたら、あり得ないくらい怖いことで、不良の間で有名な奴だ」

本人が聞いたら泣くな……。

「まあ、そのせいで周りの怒りが僕に集中して、結果として『疫病神』が誕生したんだがな」

遠い目で、いろいろ省いて説明する。

「いろいろあつたんですね」

「そうじゃな……」

「……………不憫」

なんで同情されてるんだ？

たわいもない会話をしていると

『おはよー………って何事！？』

明久が登校してきて、クラスメイトの惨状に叫んだ。

その声を聞いて、島田さんがなぜか飛んでいった。

面白そうだから見に行くか。

「吉井っ！」

「いぶあー！」

お、島田の右ストレートが明久を吹き飛ばしたな。

「島田さんおは「おはようじゃないわよ！アンタ昨日のこと忘れたわけじゃないわよね？」ーはい」

なにがあつた？

「山本！吉井は昨日はウチを見捨てただけじゃなく、消火器のイタズラと窓を割った犯人に仕立て上げたのよ！おかげで彼女にしたいランキングが上がったじゃない！」

どうやら、声に出てたらしく、島田が教えてくれた。ていうか、ランキングに入ってたのか？

「明久」

「な、なに総司？」

「骨は拾ってやる」

「僕は死ぬの！？」

死ぬだろうな。島田じゃなくて、あの人で

「本当なら、ここで掴みかかるんだけど」

殴り飛ばしたけどな。

「十分、罰がくだったみたいだし許してあげる」

「うん。いま鼻血が止まらないんだ」

勘違いしてるっばいな。

「そんなもん気にならなくなるぞ」

「今日の補給試験の監督船越先生だつて」

明久は島田の言葉で、全速力で逃げ出した！

「吉井君どこへ行くのですか？」

しかし、回り込まれてしまった！

「吉井の運命はいかに？」

「お主は楽しそうじゃの……」

当たり前だ♪

吉井の不幸（自業自得）（後書き）

倉石黑夜は黒炉さんのアイデアです。
まだ出てないけどね。

山本「ちなみに人外もオリキャラだ」

うん。いきなり出てくるな。

山本「しかし、無駄に複線はったな……」

気にするな♪

楽しいお弁当タイム？（前書き）

だるい

楽しいお弁当タイム？

前回のあらすじ

雄二「『ブラックキング暗黒の暴君』だと!？」

「うあー、づがれだー」

現在は四教科が終了したところで、明久の声が聞こえた。

残念なことに、明久は船越先生に捕まった後、近所のお兄さん？を紹介して誤魔化した。

「チッ」

「総司なんで舌打ちするの？」

「気のせいだ」

適当に明久を弄っていたら、雄二がこっちにきた。

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日は「姫路さんのお弁当」――あ」

うん。忘れてたなこいつ。

「姫路さん、家に忘れたとか言わないでね？」

「ちゃんと持ってきました！」

姫路さんも好きな人に食べてもらえるからか、至福の顔をしている。

「せっかくのご馳走じゃし、屋上でも行くかのう」

「そうだね」

この衛生面最悪の教室よりかは、屋上の方がましだろう。

「そうか。お前らは先に行っててくれ。ジュースでも買ってくる」

「あ、ウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

「じゃ、頼む」

「ああ」

雄二たちと分かれて、屋上へ向かう。

「天気が良くてなりよりじゃ」

「シートもありますので……」

姫路の持つシートを屋上に敷き、ワイワイと準備する。

「あまり自信は無いんですけど」

「「「「おお！」「」「」

姫路さんは自信なさげだったが、見た目はとても美味しそうだった。

「それじゃ、雄二には悪いけどー」

「……………（ヒョイパク）」

「いただき♪」

「あ、ずるいぞムツツリー二と総司」

明久のセリフを聞かずに 姫路の料理を口に運ぶ。
そこで意識が暗転した。

「あ？」

なんの前触れもなく、意識が戻った。

「あ、総司起きた？（大丈夫？）」

「ああ」

若干フラつくがどうってことない。

「どうだった？」

「どうって……（なにがあった？）」

「あははは姫路さんの料理だよ（食べたら倒れたんだ）」

普通の会話と同時にアイコンタクトで状況を聞く。

島田はいないが雄二がいるから、大体5分くらい意識がなかったっぽい。

「姫路」

「何ですか？」

「お前の料理クソマズい」

はつきり姫路に言う。

「え……？」

「ちょっと、姫路さんに失礼じゃないか！？」

姫路が傷ついた顔をするが明久のせいでもっと悪化した。

「黙れ明久。姫路味見たか？」

「いいえ、でも！わた「黙れ」」

久々に頭にきた。

「姫路。なぜ味見をするか、知っているか？」

「料理の味を確認するためです」

「……………知っているのら、なぜ味見をしない？」

「味見すると太るからです！」

「味見程度で太るか!!」

この後しばらく話が平行線になり、やや冷静になったのでアプローチを変える。

「姫路」

「何ですか？」

「味見は最終確認だ」

「最終……確認？」

「そうだ」

ここでひとつの例え話をする。

「例えば好きな人に料理を披露するでしょう」

「はい」

「その人は味見をせずに料理を好きな人に出しました」

「それでどうなったんですか？」

話の内容が内容だからか、姫路は真剣な表情だ。

「結果はその人は振られた」

「何ですか!？」

「まずかったからさ」

「え？」

もう一押しかな。

「その人は作ってもらった料理のマズさに驚いて『こんなマズいものを作る人と付き合いたくない』って言われてな」

「そんな……」

「その人が作る料理はいつもは美味しかったんだ。でも砂糖と塩を間違えたことに味見をしなかったから気付かなかったんだ」

「……………」

姫路はうつむいてなにかを考えている。

なにかを考えているのだろう。

「（今は大丈夫だけど、次は嫌われるかもよ？）」
「……」

姫路が焦った顔をしたので、もういいだろうと思って、階段へ向かう。

「どこ行くんのだ？」

「購買はなにもないだろうから、コンビニでパンでも買ってくる」

そう言いながら、あっさりと屋上を去った。

「似合わないことしたな」

自分らしくない。

他人に説教なんて本来の人格じゃ、ありえない。

「あいつらの影響か？」

かもしれないな。馬鹿らしいが、ありえなくもない。

少しずつだが自分も変わっているのだろうか？

楽しいお弁当タイム？（後書き）

最後がいまいち。

山本「僕のキャラブレまくってない？」

気のせい（汗）

山本「ふーん」

オリキャラはまだまだ募集中です！

山本「逃げたな」

楽しいお弁当タイム? 2 (前書き)

それではどうぞ

楽しいお弁当タイム？2

前回のあらすじ

山本「……………ならなぜ味見をしない？」

サイド明久

総司がいなくなった後、迂曲左折あり、試召戦争の話になった。

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

島田さんの質問に雄二が答える。

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てない」

雄二らしくない降伏宣言。だが、無料もないだろう。

Aクラスの生徒のうち、40人はBクラスより少々点数が上の普通の生徒だ。

でも、残り10人がヤバイ。おそらく1対10で奇襲が成功したとしても、恐らく返り討ちに遭うだろう。そのくらい、次元が違う。

「最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、Aクラスだ」

「雄二、言ってることが違うじゃないか」

「雄二の言う通り、クラス単位じゃ勝てないだろうな」

コンビニの袋を下げた総司が戻ってきた。

「どういうこと？」

「クラス単位では無理だが、一騎打ちに持ち込むんだ」

そのまま座り込んで、買ってきたパンをみんなに配る。

「なんで？」

パンを食べながら、総司にきく。

「明久少しは考える。この場にAクラス代表に勝てる可能性のある人物がいるだろ？」

Aクラス代表に勝てる可能性のある人物……？

「もしかして姫路かの？」

「ピンポン」

確かに姫路さんなら、勝てる可能性がある。去年の学年次席だし。

「総司。一騎打ちするのは姫路じゃない。俺だ」「は？」

雄二の言葉が意外だったのか、総司が変な声を上げる。

「なんで？」

「俺がなんとかする」

どうやらまだ策を明かさないうもりらしく、きになる言い方をする。

「……構わんがミスるなよ？」

「しねえよ」

総司と雄二が軽口を叩くって事は、次も大丈夫だろう。

「明久、今日のテストが終わったら、Bクラスに宣戦布告して来い」

前言撤回、大丈夫じゃなさそうだ（僕の身が）。

「断る。雄二か総司が行けばいいじゃないか」

「んー、行ってもいいけどこき使われるのもなー」

「それなら、ジャンケンで負けた奴が行く、でいいな」

「心理戦あり？」

「ありだ」

心理戦って、なにかを出すか言って、裏をかくのかどうかってやつ。

面白そうだ。

「わかった。それならなら、僕はグーを出す」

「なら俺（僕）はー」

「お前がグーを出さなかったらブチ殺す（在学中に彼女できないようにする）」

なにその心理戦！？

「ジャンケン」

「わああっ！」

パー（雄二と総司）

グー（僕）

「決まったな」

「行つて来い」

「嫌だ！ていうかさっきの脅しは酷いじゃないか！」

「明久はDクラスみたいに殴られるのを心配してるのか？」

「それもある！」

「（ほかになにがあるんだ？）大丈夫だ。Bクラスには美少年好きが多いらしい」

「なら安心だね！」

「（乗せやすいな）ああ、そうだな」

「でも、お前不細工だしな……」

「365度、どこから見てもイケメンじゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度ってこと？」

「二人なんて嫌いだ！」

1年の365日と混ざっただけなのに、馬鹿にして！

「とにかく頼んだぞ！」

「頑張れよ」

雄二と総司の言葉を背に昼食はお開きになり、テスト漬けの午後が始まった。

楽しいお弁当タイム? 2 (後書き)

次はBクラス戦入ります。

オリキャラはまだまだ募集中

Bクラス戦開幕！（前書き）

始まり始まり

Bクラス戦開幕！

前回のあらすじ

山本&坂本「お前がグーを出さなかったらブチ殺す（在学中に彼女ができないようにする）」

テスト受けなくても、良かったけど、流れ的に受けてしまった山本だよ。

前回から1日が過ぎ、Bクラス戦前の代表の激励タイムだよ！

「さて、皆、総合科目テストご苦労だった。午後からBクラス戦だ
が殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

モチベーションがまったく下がらない。これはFクラスの一つの武

器だな。

「今回は敵を教室に押し込むことが重要になる。絶対に渡り廊下戦は負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

「前線部隊は姫路・山本が指揮を取る」

「が、頑張ります」

「野郎共、姫路のためにきっちり死んでこい！」

『うおおーっ！』

士気は最高潮まで上がる。

キンコーンカーンコーン

昼休み終了の鐘が鳴り響く。Bクラス戦開幕の合図だ。

「行くぜ野郎共、目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

僕らは全力でBクラスへ向かう廊下を駆け出した。

さあ、Bクラス戦の始まりだ！

『いたぞ、Bクラスだ!』

『高橋先生を連れているぞ!』

『生かして帰すな!』

『おおーっ!』

だが、所詮はBクラスとFクラス点数差は3倍近くある。

きちんとフォローをいれないと、戦力が激減されてしまう。

「クロはBクラスに入ったんだな? あ、二人やられた」

「ああ、そうだ。しかし、総司がFクラスっていうのが驚いたぞ。お、こっちも一人やられた」

「クロはこれに参加しないのか? あ、また一人やられた」

「ああ、あのクソ野郎の為に戦いたくない」

「クソ野郎って? また一人やられた」

「ウチの代表は根本のゴミ野郎だ。お、こっちも一人やられた」

「あー、そう言うことか」

『『『お前ら、戦えよ!』』』

和やかにクロと談笑していたら、戦場の全員から突っ込まれた。

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、ん、なさ、い……」

「気にするな姫路さん。野郎共についてこられなくて当然だ」

姫路さんの謝罪に軽くフォローを入れておく。

『来たぞ！姫路瑞希だ！』

「あれ？姫路さんってFクラスなの？」

「ああ、振り分け試験を途中退席したんだと」

同じ部隊の明久が姫路さんを前線にたたせる。

「試獣召喚^{サモン}」

あ、姫路さんの召喚獣が腕輪してる。

「姫路さん、腕輪持ちか……」

「クロも腕輪持ちだろうが」

腕輪はたしか400点を越えた召喚獣のみ持っている特殊装備だ。

姫路さんの召喚獣が放った一撃で、Bクラスの二人が戦死した。

「名付けるなら『熱線』ってところか？」

「そのまんまだな」

姫路さんが一撃で敵を葬った為にBクラスの連中に衝撃がはしる。

「み、皆さん、頑張ってください！」

「ここで頑張ったら姫路さんからの評価が上がるかもよ？」

『やったるでえー！』

『姫路さん最高ー！』

姫路さんの指揮官らしくない指揮と、僕の呟きにFクラスの士気は止まることを知らないかごとく上がりまくる。

「振り分け出なけりや良かったな……」

「なんで？」

「いや、Bクラスのクソ野郎のもとより、Fクラスの方が楽しそう
だ」

そつえば、こいつ卑怯者が大っ嫌いだったな。

『中堅部隊と入れ替わりながら後退！戦死するなよ！』

相手側の指示が聞こえてくる。

「じゃ、そう言うことだから」

「なんかあつたら教えるよ」

軽口を叩きながら、クロはいなくなった。

あいつ戦ってないよな？

「総司！Bクラス代表は根本らしい。念のために教室に戻るぞい！」

秀吉がなんかよんでるから、ちよつと教室に戻りますか。

Bクラス戦開幕！（後書き）

『ブラックキング
暗黒の暴君』登場！

山本「それクロは嫌ってるからやめな」

蔵石君は根本が嫌いなため活躍はしませんでした。

山本「率先して根本を狩りにいくようなやつだしな」

オリキャラはまだまだ募集中だよ。

山本「予想よりかなり少ないからな」

次回もお楽しみに。

根本の策略（前書き）

なんかなあ。

主人公が……

根本の策略

前回のあらすじ

蔵石「Fクラスの方が楽しそう」

「……うわ、酷い」

「こう来るとはのう」

「卑怯、だね」

「だけど、的確な嫌がらせだな」

教室に引き返した僕らは、穴だらけになった卓袱台とへし折られたシャーペンと消しゴムだった。

「これじゃ、補給もままならない」

「地味じゃが点数に影響がでるのう」

「根本って、器小さいな」

「気にするな。修復に時間は掛かるが、作戦に影響はない」

「雄二がそう言うならいいけど」

明久がなにか釈然としなさそうな表情をしている。なにか引つかかっているのだろう。

「雄二、この様子だと教室にいなかったのか？」

「ああ、Bクラスと協定を結ぶために教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

「4時までには決着がつかなかったら、戦況をそのままに明日の午前9時に持ち越し。その間試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。つてな」

「僕らに有利だな……」

……なんだかなにかの仕掛けにしか感じられない。

「承諾したの？」

「そうだ」

「体力勝負に持ち込んだ方がウチらは有利何じゃないの？」

「他はともかく、姫路さんが持たないと思うが？」

「あ、そっか」

考えてもいなかったらしい。

こいつら作戦とか僕らに丸投げしすぎだろ。

「今日は相手側を教室に押し込んだら終了になるだろう。作戦の本番は明日になる」

「この調子だと決着は無理そうだね」

「つーか、クラス全体より姫路さんの方が重要っていうのはヤバいな……」

「どういうこと？」

「もし姫路がやられたらどうする？」

また考えてもいなかったらしい。

本当に大丈夫か？

「でも姫路さんは点数が高いから大丈夫じゃない？」

「いくら姫路でも補給無しに連続で戦ったらいつかは戦死するぞ？」

「だから受けたの？姫路さんが万全の状態で勝負出来るように」

「ああ、この協定はかなり都合がいい」

「なんか引つかかるがな」

ちよつと、調べるか。

「雄二、きになることがあるから、ちよつと調べてくる。明日から本格的に参加する」

「……わかった。気になることがあったら知らせろ」

「はいよ」

そう言つて、教室をでる。

ついでにいろいろ確認しますか。まずはBクラスの周辺からかな？

しばらく、こそこそと調べものをしているうちに休戦に入り、蛇足だが調べものを始めることにした。

「やっぱ、Ｃクラスかな？」

ちょっと気になる噂が聞こえたので、一応確認しておこう。

Ｃクラスに向かう途中で雄二達に出くわした。

「あれ？雄二達何事？」

「総司か、ちょうどいい。Ｃクラスに行くからついて来てくれ」
「？いいけど」

そうして、僕を加えた７人でＣクラスに向かうことになった。

「Ｆクラス代表の坂本雄二だ。Ｃクラス代表「あれ？根本じゃん。なんでここにいるの？ここＣクラスだね？」」

教室の奥にいた根本と目が合ったので、話し掛けてみる。

「なんでBクラスの君がどうしてこんなところに！」

明久空気読め。

「（ナイスだ総司）Cクラス代表に挨拶をしにきた」

「代表は私よ。挨拶？」

「ああ、この先にいろいろあるだろうからな。よろしく」

「そう。こちらこそ」

Fクラス代表とCクラス代表の（たしか）小山さんの握手がかわされる。

「それじゃあ、サヨナラ」

「ええ。サヨナラ」

「ちよつとゆう（ムガツ！）」

明久の口を塞いで、Cクラスからでる。

「総司！なにするんだよ！」

「お前があそこで余計なことを言ったら、根本は『試召戦争に関する一切の行為の禁止』を盾に袋叩きにあうぞ」

「え！？」

「ああ、総司助かった」

「どうも。僕もこれで確信は深まったしな」

さらっと言った台詞になぜか皆の注目が集まる。

「なに？」

「なんの確信が深まったんだ？」

「んー？Cクラス代表の小山が根本と付き合っているっていう噂」

『なにい!』

うおっ!ビックリした!

「それは本当か?」

「おそろくな」

お前からこそそとなんで根本がとか言うな。

「じゃあ、僕は用事あるから帰るな」

「ああ、じゃあな」

さーて、帰りますか。

根本の策略（後書き）

次はちょっとした蛇足になります

キャラ紹介&蛇足（前書き）

読まなくても影響はないはず。

キャラ紹介&蛇足

蔵石黒夜くらいしくろや 男 17歳

家族構成

祖父 父 母 妹

家が（総合格闘技の）道場なので、ほぼ毎日祖父にしごかれている。

見た目

黒髪が少し伸びている。瞳の色は黒。身長は180cm

ゲームと料理以外には無関心。誰かの為に一生懸命頑張る人が好き。嫌いなものはピーマンと卑怯者と小心者。

その他

成績は日本史、世界史、現代社会限定で腕輪クラスの400オーバー。それ以外は平均80〜100点。総合は2000前後。

キレた時の攻撃性の激しさから、『暗黒の暴君ブラックキング』と恐れられている。

ちなみに中学時代には悪鬼羅刹（坂本雄二）とよく喧嘩してたらしい。

本人曰わく、道場の影響でどんな武器でも振り回せるらしいが本当かどうかは不明。

提供者 黒炉

あの後Cクラスにて

「ちっ、気付かれちゃったか」

「残念ね」

「いや、そうでもない」

「？」

「元々この策はFクラスの代表を上手くいったら首を取れるくらいにしか思ってたからな」

「そうなの？」

「当たり前だ。第一、BクラスとFクラスが戦って俺が負けると思うか？」

「思わないわね」

「だろ？だからこれは運が良ければ戦争が終わるくらいの意味しかない」

「でも、Fクラスにあの姫路さんがいるわよ？」

「それについても心配ない」

「どうして？」

「『これ』があるからな」

「手紙？」

「ああ、姫路が書いたラブレターだ」

「恭二？」

「なんでそんな怖い顔をする！？俺宛てじゃないぞ！」

「そうなの？」

「ああ、中はFクラスのバカの名前が書いてあった」

「……もしかして」

「恐らくそれだ。姫路の性格からして『これ』を試召戦争中に見せつけたら、姫路は使い物にならん」

「それは大きいわね」

「ああ、この紙切れで姫路が無力化出来るんだ」

「恭二明日は勝ちなさいよ」

「当たり前だ」

……………一部始終を聞いてしまったな。

あのクソ野郎そんな手を使うつもりか！

今すぐあいつを殴り倒したいが、それだけじゃ収まらない。

あいつの力を借りるか――

『もしもし？クロから電話なんて珍しいな？』

こんなときに頼りになりのはこいつだけだ。

「いきなりで悪いが総司。実は――」

キャラ紹介&蛇足（後書き）

蛇足だな……。

山本「僕の出番まったくないんだけど？」

気にするな。

山本「根本と小山の出番の方が多いのが気に食わん！」

Bクラス戦で発散しな。

どんな事でも仕込みは大切だよ！（前書き）

仕掛けの一部を紹介します。

どんな事でも仕込みは大切だよ！

予想外に早く目的を達成したので、帰るか遊ぶか迷っていると懐の携帯が震えた。

取り出して確認すると、珍しい人物から着信があった。

「もしもし？クロが電話なんて珍しいな」

『ああ、総司。実はあのクソ野郎が姫路を無力化する方法を聞いてしまった……』

「姫路を無力化？」

『ああ、なんでも姫路の書いたラブレターを盗んだらしい』

「よくそんなの知っているな？」

クロのことだから、偶然聞いたんだろうけど。

『実は帰ろうとしたらクソ野郎とその彼女ーあ、小山の事だ。でその会話が聞いちまってな……』

やっぱ、根本と小山は付き合っているっばいな。

「ふーん」

『ふーん、ってなんだよ！』

「いや、あまりにも予想通りだったんでちょっと呆れてた」

『今から殴りに行くぞ？』

「ごめん被る。で、どうしろと？」

『あのクソ野郎をぶっ飛ばしたい』

「すればいいじゃん」

『アイツの事だ。ぶん殴ったらそれを口実に何かされるに違いない』
「有り得なくもないね」

こいつもそのくらいは考えて動くようになったんだな。

『総司。頼む!』

「はあー、わかったよ」

『本当か!?!』

「んで、報酬は?」

『え!?!えーつと』

「ないの?」

いくらクロでも、ただ働きさせられるのは割に合わない。

『ちよつとまで。えーつと……………あ、あのクソ野郎を好きに
していいぞ!』

「クロに都合が良すぎる上にあんなのいらねえ」

『じゃあ、どうしよう?』

「僕に訊くなよ」

『しかしなあ』

困った様子のクロ。しかし、報酬なしならこの件は無しに……………。

あ、そうだ!

「クロ。ちよつと聞くが根本と小山は付き合っているのか?」

『?ああ、そうだが?』

「なら、あいつの絶望面でいいか」

根本の絶望面。うん。面白そうだ。

『？小山か？』

「いや、根本」

『よくわからんが受けてくれるのか？』

「ああ、でもクロにも動いてもらうよ？」

『どんな事でもするぞ！』

「男にその台詞聞かされなくなかったな……」

『そんな事どうでもいい』

「はいはい」

こいつ本当に単純っていうか純粹っていうか。なんというか子供っぽいな。

『で、どうするんだ？』

「んー？FクラスがBクラスに勝つ」

『確かにそれもいいがー』

「いいのかよ」

『ウチのクラスには身体が弱い奴がいるかもしれないから』

クロはいい奴だな。だがー

「その心配はいらん」

『なんでだ？』

「設備交換はしないからだ」

『？なぜだ？FクラスはそのためにBクラスに試召戦争を仕掛けたんじゃないのか？』

「いや、ウチのクラスの目的はAクラスの設備だからな。下手に設備交換したら士気が下がる恐れがある」

『？なるほど？』

「わかったふりするな。しかしBクラスの試召戦争のモチベーションは違うだろ？」

『ウチのモチベーション？Fクラスの設備になりたくないってことか？』

「その通り。それを利用する」

『どういう風に？』

少しは自分で考えろよ。

「Fクラスの目的を僕がBクラスに流す」

『総司が？どうやって？』

「いや、普通にBクラスの噂好きの女子だけど？」

『Bクラスにそんな知り合いがいたのか……』

「各クラスに3人は情報提供者がいるぞ？」

『なんでいるんだよ！？』

いや、普通そんな知り合いがいるだろ？

人の取り巻きとか、噂好きとか、金で雇った奴とか、脅した奴とか

……

『後半二つはおかしいだろ！』

「あ、声に出てた？」

『ただ漏れた』

「あつそ。それで僕がFクラスの目的をながすからー」

『流しやがった。で俺はどうするんだ？』

「クロが聞いた根本の会話のことを流して欲しい。あ、小山の事は伏せとけ、あとのためにな」

『それだけか？』

「うん。他の根回しは僕がしておくから」

『ああ、わかった』

「んじゃ、明日な」

『サンキュー総司！』

「はいはい」

通話を切る。

「やること出来ちまったな……」

ま、楽しそうだからいいけど。

「仕込みはきちんとしないと、メインが面白くないからな」

さてと、地味にそして確実に仕込んで、

「根本の土台をぶっ壊すか」

その為にはまず電話だな。

「もしもし？ちょっと耳寄りな情報があるよ？」

どんな事でも仕込みは大切だよ！（後書き）

どうでしょうか？

山本「今回は悪巧み編か？」

まあ、そんな所。

山本「疫病神本領発揮はまだまだ先になりそうだな」

これって、疫病神の設定が薄くなりがちだったから入れた話なんだよ？

山本「作者の軌道修正か」

事実だがいうな！

山本「はいはい」

コホン。オリジナルキャラクターはまだまだ募集中です。

山本「もしかしたらあなたのキャラがでないかも？」

いや、そこはでるかもだろ？

山本「いや、これ見る人少ないし。キャラ送ってくれる人はもっと少ないし」

だから、っていうな！

コホン。オリキャラは感想と共に送ってください！

山本「あなたのオリキャラをお待ちします」

失敗

蔵石「あのクソ野郎を殴り倒したい」

「なあ雄二」

「なんだ」

「何で昨日Cクラスに行ったんだ？」

一夜明けて、教室で雄二を見つけて、昨日聞いて無かったことを聞いておく。

「ああ、Cクラスが試召戦争の準備をしてるって聞いてな」

「それで同盟でも結びに？」

「ああ、畏だっただけだな」

「……昨日僕が根本に気づかなかつたら、ヤバくなかった？」

「まあな、Bクラスに協定を盾に攻撃されただろうな」

「だよな？」

偶然気付けて良かったな。

「で、雄二の事だから何かあるだろ？」

「……お前は何かしないのか？」

「ん？根本を貶める仕込みをしたくらいかな？」

「根本を？」

「でもそれにはFクラスの勝利がある程度必要なんだよね」

「なんで今回に限ってそんな事を？」

「いや、Bクラスが勝ったらあいつ調子に乗りそうだし」

「それを防ぐためか？」

「半分正解」

「残り半分は？」

雄二が怪訝そうな顔をする。

「あの野郎の惨めな姿っていうのが面白そうだから」

「……」

「なんだよその怪訝そうな顔は？」

「なんでもない」

いや、なんかありそうな顔してたぞ？

「昨日言っていた作戦を実行する」

僕を無視して教室の皆にそう言った。

「作戦？でも開戦はまだだよ？」

「明久Bクラスにじゃないぞ？」

「へ？」

「Cクラスだ」

「なるほど。何をするの？」

「秀吉にコイツを来てもらう」

「提供は康太かな」

「……………（コクリ）」

雄二の取り出した女子の制服は康太が提供したらしい。

なぜ持っている？

「別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

「構わないんだ……。確か秀吉の姉ってAクラスだよな？」

「ああ、秀吉にはAクラスの使者を装ってもらっ」

秀吉にできるのか？

「秀吉。これに着替えろ」

「うむ…」

秀吉が生着替えを始める。

なんで秀吉は（無意識っぽい）色っぽく着替えるんだ？

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

そして康太なぜ秀吉の着替えを凄い早さでカメラのシャッターを切っているんだ？

「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうした？」

気がつくとFクラスのほとんどの男子が鼻血を噴いて倒れ、女子は膝について落ち込んでいる。

「さあな？」

「クソッ！秀吉に見とれかけちゃった！」

「？おかしな連中じゃの」

「んじゃ、Ｃクラスに行くぞ」

「うむ」

「はいよ」

「あ、僕も行く！」

Ｃクラスへ向かうのは雄二、秀吉、僕、明久の４人のようだ。

「ここからは一人で頼むぞ秀吉」

「Ａクラスの使者だから、Ｆクラスの僕らは一緒に行けないからね」
「面白くしろよ」

秀吉は僕らの激励（？）を受けて、Ｃクラスへ向かう。

「雄二、秀吉は大丈夫なの？」

「多分大丈夫だ」

「心配だなあ……」

「秀吉が教室に入るよ？」

「明久静かにしろ」

ガラガラガラガラ、秀吉がＣクラスの扉を開け、

『静かにしなさい、この薄汚い豚ども！』

「うわあ。これ以上はない挑発だね……」

「流石秀吉」

「秀吉最高ッ（笑）」

ダメだ、笑いが止まらない。

な、何よあんだ！

「話し掛けなしで！豚臭いわ！」

『Aクラスの木下ね？なんのようよ！』

「私はね、こんな醜い教室があるのが我慢ならないの！貴方達なんて豚小屋で充分だわ！」

「豚小屋……」
「笑」

「……雄一」

「気持ちわかるが無視しろ」

[illegible]

我慢できなかった。

Cクラスから小山が飛び出してくる。

とっさに雄二と明久は隠れるが、爆笑中じゃ動けない。

「あんたは昨日の……！」

「あひ、あひひひひひひひひひひ（爆）」

「なによ！」

「豚つて（笑）」

「あんたはFクラスだったわよね？ってことは――」

あ、秀吉状況がわかってない。

「あんたFクラスね!？」

「む。バレてしまったかのう」

「いや、ひ、秀吉。そこは、ごま、かさないと」

「あ」

「やっぱりそうね!」

あーあ、やっちゃった(笑)

失敗（後書き）

山本「やっぱ、キャラがブレてるな……」

同盟

前回のあらすじ

秀吉「薄汚い豚ども！」

「あーあ、笑った笑った」

「流石に笑いすぎじゃろ……」

地味に酷いな秀吉。

「貴方達、Aクラスと私達をぶつけたかったみたいだけど、残念だったわね」

「そうでもないけど？」

「どういうことよ？」

「いや、もし誰も秀吉の事を見抜けなかったら、そのままAクラスにぶつけたかな」

「?どういう事じゃ?」

「まあ、話はクラスの中でしょうよ。Bクラスに見つかったら面倒だ」

「なに言ってるのよ? 私達はBクラスと同盟を結んでいるのよ?」

「表面上はな。明久、雄二ちよつと来い」

明久と雄二を呼ぶと渋々いった様子でやってきた。

「おい、総司! 計画が駄目になっちま「説明してやるからCクラスに入れ」ー納得できるんだろっな」

「納得しろ」

そう言つてCクラスに入り、話し合いを始める。

「その話私達になんのメリットがあるのかしら?」

「ん? Bクラスの設備が手に入る」

「なー!」

「雄二。僕らがBクラスに勝ったらどうするんだ?」

絶句している小山をほつといて、雄二に話をふる。

「…… Bクラスに勝つたら設備に手を出さないで、Aクラスに試召戦争の準備が出来ていと言わせる」

雄二も僕の考えが読めたのか、渋々話す。

「それだけなの!?」

小山が信じられないと言つ顔をする。

「そっだよ？」

「待ってよ雄二！それってまた？」

「ああ、Bクラスの設備を奪うのもいいが、俺達の目標はAクラスだ」

「仮にBクラスを奪ったらAクラスに勝つための手段がなくなる可能性があるからね」

「そっじゃったのか……」

小山も納得したように頷く。

「でもCクラスの代表とBクラスの代表は付き合っているから、それは駄目なんじゃ……」

「ああ、それなら大丈夫」

「なぜじゃ？」

ん？気づいてないのか？

「根本と小山は付き合っていないから」

「「「なッ！？」」」

「え！？昨日総司は付き合ってるって！？」

「言っていないし」

「……確か、確信を得たって言ってたな」

「それって小山と根本が付き合っていないってことなのかの？」

「ああ、正確には根本が付き合っていると思い込んでいただけだな」

「……よくわかったわね？」

「一応聞くが根本の事どう思ってる？」

「総司。それって聞いちゃ駄目なんじゃ……」

「あいつのことは嫌いよ」

「だろうね」

「のう、総司。どうして確信が持てたのじゃ？」

「昨日確信を持てたのは小山が僕が根本を見つけた時、心なしか安堵してるみたいだったからね」

「そうだった？」

「いや、皆根本と僕に注目してたからな。気づいたのは僕くらいだと思う」

「ところで、なんで私達に話を持ちかけたわけ？」

「秀吉の演技に気づいていたのがいたから」

「うむ。いたの、わしに疑いの目を向けていたのが」

「教室から離れていたのによくわかったね？」

「扉が開いてたから、気づいた」

そこで僕の考えを完全に読み切った雄二が話を進める。

「で、Cクラスはこの取引を受けるか？」

「CクラスはBクラスの設備を手に入れて、Fクラスに攻め込まない。ってところかな？」

小山は考え込んでいる。

「……それ以外に何かあるわね？」

「あるっちゃ、あるが根本と付き合っていないから頼むぞ？」

「どういう事？」

「根本を貶める。そのさいに思いっきり振って欲しい」

「いいわよ」

「どうやってふるの？」

「Fクラスに負けたからで十分でしょ？」

「いや小山、ふるための材料は用意するから、それで振ってくれ」

「雄二？」

「あ、これからのためにもいいつきあいをしなきゃね」

「わかったわ。この同盟は受けるけど、それって貴方達が勝たなきゃ成り立たないわよね？」

「大丈夫だ。疫病神がいるからな」

「雄二、勝手に僕を使うな！」

Cクラスに戦慄が走る。

「あー、大丈夫だ。喧嘩を売らない限りこっちはなにもしない」

「疫病神がいるなら大丈夫ね……」

「同盟は成立だな」

「ええ、よろしくね」

「おい、てめえ」

「そろそろBクラス戦だから行くぞ」

「ああ、そうだな」

「なんか釈然としねえ」

「遅れるぞい」

口々に言いながら、Cクラスを後にする。

『疫病神を敵に回さずに済んでよかった……』

『敵になったらヤバかったな……』

去り際にそんな声が聞こえた。

「ねえ、総司」
「なんだ？」

Fクラスに向かう途中に明久が声をかけてきた。

「さっきの同盟って必要だったの？最初の雄二の作戦の方がよかったと思うんだけど？」

「いや、あれはその場凌ぎの策だからな。後で確実にバレる」

「でもCクラスがAクラスに負けたら3ヶ月の宣戦布告の禁止ですよ？」

「3ヶ月はな」

「？どういう事？」

「明久、もしCクラスの3ヶ月の宣戦布告を禁止がとけたらどうなる？」

「？もちろん復讐に――あ」

「そ。無駄な禍根が残る」

「ああ、俺は別に構わないが総司の機転で敵が減った」

「最後に僕で脅した奴が言うな！」

騒ぎながらFクラスに向かう。

さてと、Bクラス戦再開するな。

楽しみにしとけよ根本！

同盟（後書き）

ちなみに総司は別に根本を嫌っているわけじゃありません。

山本「比較的どうでもいいやつだから」

なんで今回は根本を貶めるんだ？

山本「今回の根本の行動は感に触ったから」

あつそ。

表から裏に裏から表に（前書き）

微妙……

表から裏に裏から表に

前回のあらすじ

山本「根本と小山は付き合ってない」

「ドアと壁をうまく使うのじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」

「意味なく逃げた奴は補習を受けさせるからな」

秀吉の指示に加えるように脅しを混ぜる。

午前九時からBクラス戦が再開し、Bクラス前の位置から進軍して
た。

「ねえ総司」

「なに？」

「なんかBクラスの様子がおかしい？」

「どんなふう？」

「なんていうか……」

「やる気がなさそう?」

「そうそれ!」

おそらくやる気がなさそうなのは昨日の仕込みのせいだろうか……
明久にわかるくらいじゃ相当だ。

『なにしてる!ちゃんと戦え!』

根本もそれが伝わっているらしく、イライラした声が響く。

「姫路の動きが悪いな」

「うん。なにかあったのかな?」

「さあな?」

ここはとぼけておこう。

「でもそれを見て、Bクラスの動きも悪くなってるない?」

「そうだな。なにか思い詰めたような顔しているな」

「うん」

よしもういいかな?

「いい具合に不満が貯まってきたな」

「どう言うこと?」

「まあ、見てなって。おい、Bクラスの皆!」「?」

Bクラスに声を掛けたら明久が変な顔をする。

「裏切れ」

その言葉にBクラスの皆が揃って道を空ける。

「え！？なんで！？」

「お前らなにしてる！」

焦った根本の声が聞こえる。

畏かと警戒してる他のFクラスの面々を無視して、明久を伴い根本の前へ。

「明久。お前が行け」

「え？」

「あれ」

僕が根本のポケットを指すと紙切れが見える。

それを見て明久の顔が変わった。

「総司。行ってくる」

「（意外といい顔するんだな）戦死したら殺すぞ」

「しないよ！Fクラス吉井明久、Bクラス根本恭二に勝負を挑む試
獣召喚^{サモン}」

「Fクラスがなめるな！試獣召喚^{サモン}」

近衛兵がいなかったためイラついた様子で根本は召喚する。

明久の召喚獣と根本の召喚獣が現れる。

「明久。さつさと終わらせろ」

「わかった」

「ふざけるな！」

「Fクラス吉井明久 VS Bクラス根本恭二

数学 31点 VS 186点

「

わお、6倍もあるよ。

「この！」

「ほいつと」

「えい！」

「ハズレ」

「当たれ！」

「当たるか！」

うん。なんて表現すればいいのかな？

とりあえず、見たままに話すね？

根本が突っ込んで、明久がそれにカウンターを当てたり、よけて大振りの一撃を入れている。

「なぜ当たらない!？」

「おー、流石観察処分者」

「なに!？観察処分者だと!？」

「ああ、そうだけど？」

「バカの代名詞に負けてたまるか！」

しかし、見る見るうちに根本の召喚獣は弱っていき、

「トドメだ！」

「Fクラス吉井明久

V S

Bクラス根本恭二

数学

31点

V S

戦死

「

戦争は終結した。

表から裏に裏から表に（後書き）

山本「明久の凄さがわかりにくいな」

文才ありませんし？

山本「なぜ疑問系？」

さあ？

戦後対談と種明かし

前回のあらすじ

山本「裏切れ」

Bクラス代表の根本が戦死して、試召戦争は終結したがFクラスの面々は今までの事に理解が追いつかないのかポカンとし、逆にBクラスの面々は明久に負けた根本を蔑んだ目で見ている。

「明久、お疲れ」

「あ、うん。総司」

パンツと明久とハイタッチする。

それを見てFクラスの面々は事態を理解して、騒ぐ。

「おい、総司」

「お、雄二」

「お、じゃないなにしたんだ？」

本陣にいた雄二が戦後対談のためにBクラスにきた。

「これ？」

「ああ」

仕方がない。種明かしをしますか。

「どこから話す？」

「全部だ」

「はいよ。昨日の放課後に電話があつたんだ」

「電話？」

「あ、俺だな」

「クロ、口挟むな。まあ、クロから電話が来たんだ」

「なんて？」

「詳しくは言わんが根本が姫路を戦力外にするための作戦」

「姫路をかの！？」

「騒ぐな秀吉。で僕はクロの依頼を受ける事になった」

「根本を貶めたいってな」

「まあそつだ」

「そこから仕掛けを始めたのか？」

流石雄二、鋭い。

「ああ。と言つても大した事はしてない。ただ情報を流してお願い
しただけだ」

「情報？」

「お願いですか？」

「ああ。簡単に言ったら『根本が卑怯な手段で姫路を戦力外にするつもりだ。そんな代表について行くのか?』と『小山と付き合っている癖に姫路の弱みを握って言うことを聞かせるつもりらしい』そんなだけだ」

皆の視線が根本に集まる。

「ちょっと待て!？俺はそこまでしてないぞ!？」

「変態はほうって置いて。ここまでで質問はあるか？」

変態を無視して、質問を集う。

「お願いのほうを聞いてないぞ？」

「あ、忘れてたな。……いや、大した事じゃない。精々『裏切れと言ったら、根本と観察処分者を戦わせさせてくれ』つつただけだ。ま、ここは賭けだったかな」

「それだけか？」

「他にもあるが細かい事だぞ? 『根本の偉そうな指示で不満が溜まるまで』ある程度まで待ったり、『Fクラスが設備交換をしない』ってながして士気を下げたり、まあ最大は『そんな卑怯者と一緒に居たいのか?』って聞いたりとかな」

「……お前が敵じゃなくて良かったよ」

「そうね」

「そうじゃな」

「……………（コクコク）」

「あははは……………」

なんで皆そんな目で僕を見るんだ？

「総司。なんで僕と根本を戦わせたの? 総司でも良かったんじゃない

い？」

「戦争に勝つためだけなら、そうするが。今回は根本を貶める為のものだからな」

「それで明久を使つたのか……」

明久を除いて皆納得する。

「え？どういうこと？」

「明久。もし自分達をまとめているまたはついて行っていた人がバカだと言われてる奴に負けたらどう思う？」

「そりゃ、その人は使えないから……。あ」

「まさにそれだ」

「しかし、総司それはBクラスの前で言っていることなのかの？」

「構わないよ。なんせ根本のやってきた事がやってきた事だからな」

噂で根本はカンニングの常連だとか、相手チームに一服もったとか、喧嘩では刃物はデフォルトとか。

信じる方が難しい。

「雄二。後の交渉は任せる」

しゃべり疲れたので後は雄二に任して、ちょっと用事を果たしますか。

すぐそのCクラスについた。

「こんにちは！あれ？おはようかな？」

「どっちでもいいわ。あ、戦争勝利おめでとう」

適当な事を言いながらCクラスに入ると小山さんが出迎えてくれた。

「正確には和平交渉での終結だけだね」

「こっちは試召戦争の準備は終わっているけど……」

「あ、それなら僕らが行くタイミングで言っただけ？」

「……本当にBクラスの設定が手に入れるんでしょうね？」

「当たり前だよ？根回しは済んでるよ」

「なら良かったわ」

しばらく小山さんと雑談して時間を稼ぐ。

「そろそろかな？」

「なにがかしら？」

「ちょっと待ってね」

メールがきたのでそれを確認して、よし大丈夫だ。

「じゃ、いこうか」

「根本のところ？」

「そ、宣戦布告してね？」

Aクラスの横で少し待つと根本が出てきた。

なぜか女装姿で

.....

「ゆ、優香!？」

「……（笑いをかみ殺してる）」

「別れましょう」

「ち、ちよつとまでこれは違うんだ!!」

「あ、あはははははははははははははははは（爆笑）」

なにこれ面白ッ！

戦後対談と種明かし（後書き）

意外とえげつない手を使うな……

山本「そうか？」

えげつないぞ？それは兎も角、各クラスの生徒のオリキャラはまだまだ募集中です！

山本「なんか新しく条件が付いてるし……」

明久に春が！？（前書き）

山本「前回のあらずじつて、役割果たしてないよな？」

僕が個人的に気になっていた台詞を書いてるだけだしね？

明久に春が！？

前回のあらすじ

小山「別れましょう」

「あー、面白かった」

根本の女装を見せて小山と別れさせたのち、Bクラスでの撮影会に興味が無かったので、Fクラスに向かっていた。

「ちょっといいかい？」

「うん？」

Dクラスの前でDクラス代表の

「確か平賀だっけ？」

「ああ、実は室外機の件だが……」

「ああ、あれね。いや、終わったからもういいよ」

「しかし……」

平賀の歯切れが悪い。

「あ、借りを作りっぱなしにしたくないと？」

「……ああ」

「なら、Cクラス戦後にBクラスに宣戦布告してくれない？」

「Bクラスに？」

「ああ、その時はCクラス並みの設備になっているだろうからね」
「しかし」

「大丈夫だって、安定した指示がだせる平賀なら勝てるさ」

Dクラスは少ししか見てないがあれは安定したいいい指揮だった。

「じゃ、そういうことで」

「ああ」

平賀がなにか考えているあいだにさっさと教室に向かう。

Fクラスについたので、扉を開けると

「あ、ありがとう、ごじます……！」

「えええ！」

「……」

なにこれ？

描写すると明久が姫路に抱きつかれて、アタフタしてる以上。

「総司！？いつの間に！？」
「はいッ！？」

僕は神妙な顔をして

「明久」

「な、なに？」

「これ」

「なにこれ？」

「コンドーム」

「ぶふおっ！？」

「山本くん！？」

暖かい笑みを浮かべて、

「友人として成功をいのる！（グッ）」

ガラガラーピシャッ

さてとBクラスにでもいくか。

「ちょっと待つて！？誤解だよ！？」

「山本くん違います！？明久くんとはしませんよ！？」

「……うん。そうだよね……」

「明久くん？」

「……うん。……期待した僕がバカだったんだよ……」

「明久くんさっきのはそういう意味じゃなくてですね……」

ちなみにこの言い争いは皆が戻るまで続いた。

明久に春が！？（後書き）

山本「オリキャラは募集中だぜ！」

キャラ変わってる！？

蔵石「一応、Aクラス戦が終わったら締め切るぜ！」

蔵石がなぜいる！？

蔵石・山本「気にすんなって」

本当にこのクラスおかしいよな!?

前回のあらすじ

山本「友人として成功をいのる!」

意外に早く終わったBクラス戦の後は補給試験で1日が終わった。

ちなみにあの後、明久はFクラスの連中がくるまで落ちこんでたらしい。

押し倒せば良かったのに……

いよいよ残るはAクラス戦のみとなった僕らは、雄二の作戦の説明を受けていた。

「まずは皆に礼を言わせてくれ。ここまでこれたのは皆の協力があったこそだ」

「ゆ、雄二、どうしたのさ？」

「雄二には似合わないな」

「自分でもそう思うが、これが俺の偽らざる気持ちだ」

「確かにFクラスがここまでこれたのはすげえよな」

「ああ、ここまでできたら、絶対にAクラスに勝つ。勝って、勉強だけじゃないという現実を教師どもに突きつけてやるんだ！」

『そうだーっ！』

『おおーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

見事に雄二に乘せられているな。

「残るAクラス戦だが、一騎打ちで決着をつける」

「それはいいが誰がでるんだ？」

Aクラスとの一騎打ちはいいが、勝てそうなのは僕と姫路、あと（一万歩譲って）明久くらいだ。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

「？」

なんでいま、学年主席の霧島を名前で呼んだんだ？

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあつー！」

「雄二カッターを投げるのは構わんがーちゃん当てる危ないだろ」

「総司！？それって僕が危険なんだけど！？」

明久黙れ。

「明久の言う通りまともにやれば勝ち目はない」

「じゃあ、カッターなんて投げないでよ！」

「黙れ」

「でもまあ、それはまともにやれば……だろ？」

「そうだ。Dクラス戦もBクラス戦も勝ち目は無かった」

「確かに」

「今回も同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる！」

『おおーっ！！』

「具体的な内容は？」

「上限ありの日本史の小学生並みのテスト」

「つーことは、純粋な点数勝負か？」

「そうだ」

「集中力がものをいうな」

「でも、同点ならきつと延長戦だよ？」

「明久の言う通りじゃな。延長戦で問題のレベルが上がると雄二には厳しくなるの」

分の悪い賭だな。

「そこまで運に頼った作戦は言わん」

「なにか勝利の方程式でも？」

「ある。翔子は間違いなく、ある問題ができれば確実に間違える」

「ある問題？」

「それは『大化の改新』」

「小学生並みとなると年号か？」

「そうだ」

「たしか大化の改新って645年だったな。……明久すら間違えそ

うにないが？」

「……（ササツ）」

明久。わからなかったのか？

「あの坂本くん。霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」
「ああ、あいつとは幼なじみだ」

あ、馬鹿。そんなこと言ったら

「総員狙え！」

「なぜ明久の号令で上履きを構える！？」

「落ち着けよ。たかだか幼なじみってだけで攻撃するなよ……」

「なんで雄二なんかを庇うんだ！」

「……………総司には川端という幼なじみがいる」

「なぜ康太が知っている？」

「川端さんって、あの川端瑠璃さん！？」

「瑠璃か？確かに幼なじみだぞ？」

「川端瑠璃って、あの彼女にしたいランキングで二位のか？」

「そうだろ？」

「あの川端さんと幼なじみだと？」

え！？瑠璃って彼女にしたいランキング二位なの！？初めて知ったぞ！

ていうかやな予感。

『『『殺せえええっ！！』『』』

.....絶対このクラスいろいろおかしいよな！
？

本当にこのクラスおかしいよな！？（後書き）

ぐだぐだ（笑）

交渉（前書き）

前回のあらすじは面倒だから今回から、廃止します。

交渉

「これでラストだ」

「あー、疲れた」

「いや、疲れたで済ませられることじゃないぞい」

あれから、僕と雄二に襲いかかってきた馬鹿どもを雄二とともに床に沈めた。

「あいつ等に言葉は通じないみたいだったからな」

「まったく面倒にもほどがあるな」

「総司。Aクラスに宣戦布告しにいくぞ」

「はいよ。姫路さんと島田さん、ついでに秀吉はこいつら介抱しとけばポイント高いかもな？」

姫路さんと島田さんの視線が明久に向かう。

「じゃ、行くぞ」

「はいな」

「わしもいくぞい」

「あ、秀吉も来るんだ!？」

てっきり、みんなの介抱でもするかと思ったのに。

「一騎打ち？」

「ああ、Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

「うーん、なにが狙いなの？」

「もちろんFクラスの勝利が狙いだね」

Aクラスでの交渉の席についたのは、秀吉の双子の姉の木下優子さんだ。

こうして見ると二人ともそっくりだな。

性別が違うから二卵生の双生児のはずなのによく似てる。

ところでなぜ瑠璃は木下と交渉してるだけなのにむこうで軽く睨んでいるんだ？

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな」

「賢明だな」

「ところでBクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって、……昨日のあの……」

「そうあの汚物が代表をやってるクラスだね」

「そうだ。幸い宣戦布告してないみたいだが、さてさてどうなる」とやら」

完璧に脅しだな。

「でもBクラスは「その点は大丈夫。Bクラスとは『和平交渉にて終結』ってなっているから問題ない」ーそう」

「ちなみにBクラスだけじゃなくDクラスもな」

和平交渉にて終結させているからこそできる手段だ。

「……それって脅迫？」

「脅迫ならもつと危険度が高くてリスクの低い脅しをするよ？」

「例えば？」

「例えばー×××××とか×××××とか？」

木下の耳元で他の人に聞こえないように例を上げたら、木下の顔が面白いくらい引きつった。

「あんた最低ね」

「いやー、それほどでも」

「褒められてないぞい」

知ってる。

「うーん……わかったわ。なにを企んでいるかは知らないけど、代表が負けるわけないから、その提案受けるわ」

「総司。姉上になにを言ったのじゃ？」

「何でしょう？」

適当にはぐらかしておく。

「こちらからも提案。代表同士の一騎打ちだけじゃなくて、そうね。一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち、ていうのなら受けてもいいわ」「姫路がでる可能性の警戒か？」

「うん」

「その条件を呑んでもいい」

「ホント？うれしいな？」

「ぶりっこするなよ」

「勝負の内容はこちらで決めさせてもらう」

「そのくらいのハンデはあってもいいよね？」

「……受けてもいい」

「うおっ！？」

いきなり声が出たからビックリしたよ。

「……雄二の提案を受けてもいい」

「学年主席の霧島さんか」

「あれ？代表。いいの？」

「……そのかわり、条件がある」

「内容しだいだな」

「……負けた方はなんでも一つ言うことを聞く」

「それって、一騎打ち一つ一つ？それとも一騎打ち通して？」

「……一騎打ち一つ一つ」

「わかった交渉成立だな」

「え！？いいの！？」

「……勝負はいつ？」

「明日の3時からでもいいか？」

「……わかった」

霧島さんって、独特の雰囲気を持っているな。

「じゃ、今回はお開きってことで」

「じゃ、教室に戻るぞ」

交渉成立したので、教室に戻る。

交渉（後書き）

山本「次はAクラス戦だが大丈夫か作者？」

大丈夫だ問題ない。そしてネタはない！

山本「激しく不安になってきたぞ……」

笑えばいいと思うよ。

山本「古っ!？」

バカテスト（前書き）

今回は息抜きです

バカテスト

化学

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、マグネシウムを材料に選んだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点…マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険である点』

合金の例…ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

山本総司の答え

『合金の例…鋼鉄』

教師のコメント

鋼鉄は鋼のことなので合金でないため間違いです。

土屋康太の答え

『問題点…ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題ではありません。

吉井明久の答え

『合金の例：未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

国語

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『（１）得意なことでも失敗してしまうこと』

『（２）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる例え』

姫路瑞希の答え

『（１）弘法も筆の誤り』

『（２）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（１）は『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』
（２）なら『踏んだり蹴ったり』などがあります。

土屋康太の答え

『（１）弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

蔵石黑夜の答え

『（２）代表の卑怯者をたたき殺す（訂正）落とす』

吉井明久の答え

『（２）泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君たちは鬼ですか。

英語

以下の英文を訳しなさい。

『This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

川端瑠璃の答え

『これは私の祖母が使っていた本棚です』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強してますね。

山本総司の答え

『確かこれは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

確かが無ければ正解でした。

土屋康太の答え

『これは』

教師のコメント

君が訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

『○ ▲ □ ×』

教師のコメント

地球上の言語で書いて下さい。

物理

『光は波であつて、（ ）である』

（ ）に正しい言葉を入れなさい。

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

山本総司の答え

『素粒子』

教師のコメント

違いですが、ある意味正解です。素粒子は物質や場を構成する最小の単位と見られる粒子ですが、この場合の答えは粒子なので間違いです。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

化学

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

山本総司の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント
簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント
君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『 $B-E-N-Z-E-N$ 』

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。

英語

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ答えなさい』

姫路瑞希の答え

『good - better - best
bad - worse - worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good - gooder - goodest』

教師のコメント

まともな間違いに先生は驚いています。

goodやbadは比較級と最上級は語尾に - er や - est をつけるだけではダメです。

土屋康太の答え

『bad - butter - bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

バカテスト（後書き）

坂本「こうして見ると明久とムツツリーニはバカすぎるな……」

土屋「……………照れる」

山本「褒めてないし」

吉井「ちゃんと見てよ雄二に総司！英語の教師のコメントを」

山本「『まともな間違いに先生は驚いています』」

坂本「……………明久。これはお前がバカだと言っているんだぞ？」

吉井「何だって!？」

山本「気付いてなかったのか……………」

坂本「明久だからな」

秀吉「ワシは死んでないのじゃ!？」

「では、両名とも準備はよろしいですか？」

Aクラス担任かつ学年主任の高橋先生が立会人を務める。

確か高橋先生と鉄人先生の召喚フィールドはすべての教科を選択可能だったから、まともな人選か。

「ああ」

「……問題ない」

一騎打ちの会場はAクラス。Fクラスよりかは広いからな。AクラスとFクラスの全員が入る。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシが行くわ」

「ワシがやるっ」

木下姉弟の一騎打ちか。

……姉弟喧嘩だな。

「ところで秀吉」

「なんじゃ？」

「ちよつとこつちに来てくれる？」

「ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

あ、秀吉。君の骨は拾ってやろう。

『姉上——どうしてワシの腕を掴む?』

『アンタ私に変装してCクラスを罵倒したらしいわね?』

『それは——あ、姉上! 関節はそっちには曲がらなっ……!』

木下が戻って来た。

「秀吉は急用ができたから帰るってさ。代わりの人だしてくれる?」

「んじゃ僕が行くよ」

にこやかに返り血をハンカチで拭う木下さんに僕が言う。

「僕が相手になるよ木下さん。秀吉への弔いだ」

「いや、秀吉は死んでないわよ?」

いやいや、ノリだよノリ。

しかし、そこで二人が待ったをかけた。

「あの! 木下さん!」

「木下」

「なに? 川端に草薙」

そこで待ったをかけたのは瑠璃と人外だった。

「うげっ!?!」

「どうしたんだ総司?」

「人外がでしゃばってきたからつい」

「人外? 人外って鉄人のことじゃなかったのか?」

あ、やっぱり勘違いしていたな。

「鉄人は鉄人だろ。人外はあいつ——草薙剣だ」
くさなぎつるぎ

「なんで人外なんて言うの？」

「簡単なことだ。あいつ中学生の時に一回キレたことがあるんだが

……その時、一人でヤクザの組を圧倒してた」

「マジでかつ！？」

「ウソツ！？」

残念ながら本当だ。

「その時についたあだ名は『スサノオ荒虐神』」
あれはすごかったな……。

「クロとコンビで鉄人を相手したときも互角に戦っていたな……」

「あいつ本当に人間か？」

たぶんな。

「鉄人がバグキャラなら、あいつはチートだ」

「チート？」

「ああ、ただ強く、ただ頭がよく、ただ正義感が溢れている。それだけだ」

木下はあっさり引いたが、向こうの言い争いは瑠璃と人外が僕と戦いたいというやつらしい。

おそらく瑠璃は一騎打ちの勝者の命令権が欲しいのだろうが。

「おい、剣」

「なんだ？」

「なんでここでしゃばって来たんだ？」

「そんなのは決まっている！」

「なに？」

「お前と戦ってみたいからだ！」

「やつぱりかこの野郎」

面倒だが、こうするのが手っ取り早そうだな。

「明久ちよつと力を貸せ」

「へ？」

「ならタッグマッチなんてどうだ？」

「タッグマッチだと？」

「ああ、二人共出れば問題ないだろ？」

「俺はお前と戦えるなら構わん！」

「私もそれで」

「なら決まりだな」

そこで珍しく高橋先生が割り込んできた。

「しかし、その勝利の基準はどうしますか？」

「単純に片方が全滅した方の負けでいいでしょ」

「そうだな。勝った方が二勝ぶん貰えることにすれば構わないだろう！」

他の二人も異論はなさそうだ。

「科目を指定してください」

「なら、数学で」

「異論はないぞ！」

「わかりました。召喚を許可します！」

召喚フィールドが張られる。

「「「「^{サモン}試獣召喚」」」」

タッグマッチ開始だ！

秀吉「ワシは死んでないのじゃ!？」（後書き）

新キャラ登場！

山本「やっと伏線を回収したな」

次は草薙くんの設定です。

キャラ設定（草薙剣）

草薙 剣 くさなぎ つるぎ 男

ビジュアル

黒を帯びた緑色。瞳の色は緑。身長は190cm

性格・特徴

豪放磊落を地で行く偉丈夫で握力でスチール缶を縦に潰すほどの力を持つ。誰に対しても友好的であり、同性異性ともに友人が多い。しかし気に入らない存在（他者の思いや努力を踏みにじる者、友人を傷つける者）と敵対すれば力の限りをもって殲滅する。学園においてもつともキレさせてはいけない存在。

キレた時はもはや鉄人ですら止めることはギリギリ。またその人望から付き従うものが多く、幾度か暴動に発展したこともある。キレたときは「荒虐神^{スサノオ}」とよばれ恐れられる。

その他

成績は日本史のみ500点に近い点数を持つ（たまにカンで400点を越す）。それ以外は平均250〜300点。総合は3000点前後。

召喚獣

着崩した和服に巨大な刀をもつ。腕輪は衝撃波を放ち敵を薙ぎ払う。多くの点数を消費するが、点数によって威力 範囲が大幅に変わる。

提供者 白迅狼

キャラ設定（草薙剣）（後書き）

白迅狼さんありがとうございました。

Aクラス戦 第一試合〈数学〉

「Fクラス 吉井明久 & 山本総司

14点 & 413点

VS

Aクラス 川端瑠璃 & 草薙剣

291点 & 403点

「

まずこちらの召喚獣は、明久は改造学ランに木刀の装備。僕は流れの格闘家に腕に鎖を巻きつけてその下に腕輪がある。

一方の相手側の召喚獣は瑠璃は何だろう？森の狩人かな？装備は武骨なナイフだけ。人外の方は着崩した和服に日本刀あと腕輪。

こりゃ、差がはっきりと出たな。

「……明久」

「言いたいことはわかるけど指摘しないで」

「お前点数低いな！」

「草薙くん言っちゃダメだよ……」

「……」

明久、無言で教室の隅に行こうとするな。

「しかし、お前が腕輪を持っている事に驚いたぞ」

「たまたまカンが当たってな！」

「だろうな」

苦笑いで返す。

「総司。どういうこと？」

「あいつは日本史の一点特化がたでな。……典型的には康太が近いな」

「えっ？でも——」

「まだある。そしてあいつはたまにカンで400点を越す」
「カンで!？」

明久が畏れるように人外を見る。

「気にするな。他の教科は高くても300点前後だ」「いい加減始めろぞ！」

人外の召喚獣が僕の召喚獣に襲いかかってくる。

「明久。腕輪を使うから瑠璃と剣を一カ所に集める！一撃でシトメル」

「わかった」

「人外はこっちに突っ込んでくるから瑠璃の方を頼む」
「おう！」

明久に要点を伝えて、人外と相対する。

「行くぞ総司！」

「させるか！」

突撃してくる召喚獣に鎖を振り回し、当てようとするが、それより先に召喚獣は下がって、距離を離れた。

「腕輪は使わないのか？」

「総司が使っまでつかわないぞ！」

「なら、けっこう！」

向こうでは、

「えいつ！」

「ほいつ」

「てい！」

「ひょいと」

「なんで当たらないの！？」

明久が瑠璃の攻撃を交わしながら、人外の召喚獣に誘導している。

瑠璃なんか涙目になってるし、明久はそれに良心が痛んだのか、動きが鈍って行くがそれでも当たらない。これが経験の差か。

「むっ、近寄れん！」

「近寄るな」

それでも少しずつ鎖を弾いて、近づいてくる。

「総司！」

「ナイス明久！」

明久が瑠璃の召喚獣を人外の召喚獣にぶつけた。

「うお！？」

「きゃあ！？」

「離れる明久！」

「わかった」

「させるか！」

離脱しようとした明久の召喚獣を貫いた。

——鎖が。

「総司！？」

「Fクラス 吉井明久

数学 戦死」

「ひぎゃああああ！？心臓を貫かれたような痛みがああああ！？」

さてと条件が揃ったな。

「まさか！？川端召喚獣を俺の召喚獣の後ろに！」

「もう遅い！『自爆』」

召喚フィールドを自爆した僕の召喚獣からの爆風がフィールドを舐めまわす。

「一応、説明しとこうか。僕の召喚獣の腕輪の効果は『自爆』。400点を消費する代わりに召喚フィールドにいる召喚獣をすべて殺す。自分は生き残るけどな」

「おい、なんで教えなかった」

雄二が叫ぶ。

確かに使いようによってはかなり使えるが

「いや、これはかなり使い勝手が悪くてな。生贄が必要なんだよ」
「それが明久か？」
「今回はね」

自分を除く召喚フィールドにいる召喚獣の三分の一を僕の召喚獣で戦死させなきゃいけないからね。端数切り上げで。

そこら辺を伝えたら、雄二は使えねえと呟いて引いてくれた。

確かに使えないよね。

「さてと僕の一人勝ちだね」

「いや、違う！」

「へ？」

「Fクラス	山本総司	VS	Aクラス	草薙剣
数学		戦死		VS

15点」

あれ？なんで人外がまだ生き残っているの？

Aクラス戦 第二試合へ保健体育

「なんで負けた？」

まさか爆発に巻き込まれて、生き残ると思ったなかったため、間抜けな声がでた。

「……腕輪か？」

「正解だ！俺の腕輪の能力は衝撃波で「爆発にぶつけ相殺したのか」——そうだ！」

こんな方法があるとは知らなかったな。

「俺達の負けだ」

「よっしゃあつ！勝ったーッ！」

「うるさいぞ」

やっと痛みが引いたらしい、明久を連れてFクラス陣に戻る。

「すまん。負けた」

「気にするな。他の奴らじゃ、間違いなく負けたからな」

「そう言われると同じように扱われているように聞こえるよ」

モニターには2―0と出ている。

「もう負けられないな」「それでは、三人目の方どうぞ」

「……………（スクツ）」

「じゃ、ボクが行こうかな」

Fクラスからはムツツリー二こと土屋康太。

対するAクラスからはショートカットのボーイッシュな子。……たしか一年の終わりに転入してきた

「工藤愛子です。よろしくね」

「……………よろしく」

「教科はなににしますか？」

「……………保健体育」

聞くとところ康太は一点特化型だったはずだから、保健体育が得意科目なのだろう。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

勝負の前の舌戦かい？

「ボクもかなり得意なんだよ？……………実技で、ね」

「……………ッ！（ダラダラ）」

「明久。あの程度でときめくな」

「でも……………」

「吉井君だっけ？ボクでよければ保健体育を教えてあげるよ？もちろん実技で」

「フツ。望むところ」アキには永遠にそんな機会がないから、保健体育の勉強なんていらなのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「島田に姫路。明久が死ぬほど悲しそうな顔をしているぞ？」

「好きな奴が誘われているのを防ぐためならもうちょい明久に気を使ったらどうだ？」

明久は絶望していたため、僕の言葉が聞こえてなかったようだ。

「じゃあ、山本君はどうかかな？」

なぜ僕に振る。

「僕はかまわな——痛い！？」

「総ちゃん？」

「睨んでいる顔はかわいいかど脇腹つねるな！」

「あははは。なんだ彼女いるのか」

「瑠璃とはただの幼なじみだっ！」

「そろそろ初めてください」

全員に無視された。

「はい。サモン試獣召喚」

「……………サモン試獣召喚」

康太の召喚獣は忍者か、工藤さんの方は？

「なんだあの巨大な斧は！？」

巨大な斧に腕輪もちか。厄介だな。

「実践派と理論派、どっちが強いかな？」

腕輪の効果か、斧に電光を纏わせる。

「バイバイムッツリーニ君」

「……………加速」
「へっ？」

いきなり康太の召喚獣のスピードが速くなり、召喚獣を切り裂いた
(普通の人は消えたように見えています)。

「……………加速終了」

一呼吸置いて、工藤さんの召喚獣がバラバラになった。

「Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス 土屋康太
保健体育 446点 VS 572点」

「理論派の勝利つと」

「つよい！下手すれば僕の総合科目並みだ！」

「明久がばかだと言うことしか伝わらん」

「……………工藤。お前の敗因は慢心だ」

「……………」

……………なんか康太が格好いいんだが。

Aクラス戦第三試合へ総合科目

「これで2対1ですね。次の方は？」

高橋先生は淡々と作業を進める。

自分の受け持つクラスが負けても、仕事に私情を挟まないあたりがすごいな。

「あ、はいっ。私です」

こちらからは、我がFクラス最高得点者の姫路さんが

「それなら僕が相手をしよう」

「やはり来たか、学年次席」

Aクラスからは姫路さんのリタイアで学年次席にいる久保利光。

「ここが一番の心配どころだ」

「確かにな。久保と姫路さんの実力はほぼ互角。姫路さんが負ける可能性も否定できないな」

「……いつまで彼女侍らせているつもりだ？」

「彼女じゃなくて、幼なじみな。瑠璃もいい加減に抓るの止めな」

「……工藤さんにエッチなことをしようとした」

「いや、してないしする気もないし」

「……本当に？」

「当たり前じゃん」

瑠璃は渋々とAクラスに戻っていった。

「総合科目でお願いします」

科目の選択権は向こうにあるのか、久保が科目を告げる。

「それでは……」

それぞれの召喚獣が呼び出されて——瞬でケリがついた。

「Aクラス	久保利光	VS	Fクラス	姫路瑞希
総合科目	3995点	VS	4408点	」

『マジか!?!』

『いつの間にこんな実力を!?!』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ!?!』

点数差400点オーバーって、互角の実力ででもんじゃないぞ?

「姫路さん、どうしてそんなに強くなっただんだ?」

「……私、このクラスみんなが好きなんです。人の為に頑張れる皆がいる、Fクラスが」

いや、自分の欲望のためだと思うぞ?

「だから、頑張れるんです」

「姫路さんのセリフでスポコンのキャラみたいな雰囲気をだそうとしてなければ良かったんだがな」

「あははは」

「これで2対2です」

珍しく高橋先生に若干の驚きがよめる。

姫路の急成長に驚いたのかな？

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

Aクラスからは、学年主席の霧島翔子。

「俺の出番だな」

「しくじらないでよ雄二」

「明久に心配されるとはな」

それだけ、重要な試合になるからな。

……させないけど。

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベル——（ガシッ）」

雄二の喉を押さえて、発音出来なくする。

「ここでFクラスはAクラスに休戦を申し込む」

「……なんで？」

「いや、俺達の負けが見えたから」

「ちよつと総司！？なに言ってるの！？」

「黙れ明久。かわりに雄二^{これ}あげるから」

「……交渉成立」

冗談で雄二をやるといったら、霧島はあっさりと要求を呑んでくれた。

「ちょっと待て！？なんで勝てたのにそんな取引をするんだ！？」「雄二離れた途端に叫ぶな。……そうだな理由を見せてやろう高橋先生」

「なんででしょうか？」

「雄二に小学生レベルの日本史のテストを受けさせてくれ。百点満点の上限有りで」

「わかりました」

「雄二、百点取れなかったら霧島の要求を呑め」

「やってやるよ！」

「ではこちらです」

雄二は別室で試験を受けることになった。

「日本史限定テスト
Fクラス 坂本雄二 53点」

「無様だな」

試召戦争編閉幕

「……雄二」

「……わかってる」

床に膝をつく雄二に霧島さんが歩み寄る。

「あの点数でよくあんな啖呵を切ったな」

「……殺せ」

「いや、霧島さんの言うことを聞くって言う罰ゲームがあるぞ?」

「……（コクリ）」

雄二の正面に霧島さんが立つ。

「………!（カチャカチャカチャカチャ!）」

「ムツッリー二僕も手伝うよ!」

「……なにやっているんだ?」

断片的に聞こえる情報じゃ、百合とか姫路と霧島の絡みとか。

霧島の同性愛者説のことか?

なら、それは期待外れだな。

「わかってる。何でも言え」

「……それじゃ——雄二、私と付き合って」

「「「………はい?」」」

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったか」

「……私は諦めない。ずっと、雄二が好き」

現状が理解出来ていないその他大勢は、混乱状態に陥っている。

「他の男と付き合う気は無いのか？」

「……他の人なんて、興味ない」

「霧島さん一途だねえ」

「……照れる」

霧島さんがほんのりと頬を染める。

ありゃ、ガチ惚れしているな。

「拒否権は？」

「……ない。今からデートに行く」

「ぐあ！離せ！？やっぱりこの約束はなかったことに——」

「お幸せに」

「総司！後で覚えてろよ！」

「あ、もう忘れた」

「チクシヨウ！」

霧島が雄二の首根っこを掴み、教室を出て行った。

「「「……」」」

「帰るか」

教室が沈黙に浸されたので、空気を打ち砕いてみた。

「そうだな」

「あーあ、今までの俺達の苦労は何だっただよ」

「いうなって」

解散の雰囲気を訪れて、そろそろFクラスに帰って行く。

「アキ。今日は約束通りクレープでも食べにいきましょうか？」

そういえば、明久はAクラスへの宣戦布告のあと、島田を怒らせて、そんな約束を取り付けられてたな。

「え？それって週末って話しじゃ……」

「ダメです！吉井君と映画を観に行くんです！」

「ええ！？それは話題にすら上がってないよ！？」

……………二股か。死ねば良いのに。

そのまま明久は連行されて行つた。

「さてと帰りますかな？」

「……………」

そこで瑠璃がこつちを見ているのに気がついた。

そういえば、瑠璃に命令権があつたっけ？

変な命令される前に潰しておくか。

「瑠璃」

「！？？なに総ちゃん？」

「なぜキヨドる？まあいいが。映画のチケットがあるが観に行くか？」

「……！？行く！」

「エスコートは必要かい？」

「えっと、お願いします」

「じゃ、一緒に行こうか。校門で待ち合わせね」
「うん」

ちなみに言つて置くが瑠璃とは幼なじみであり、彼女ではないので。
そこんところよろしく！

映画館にて

「よく考えると瑠璃と映画館に来るのって、何年ぶりだ？」

「えっと、最後に行ったのが中学校を卒業してからだから、だいたい2年ぶりだね」

2年か、そんなに空いてたのか意外だな。

「チケット代、コーラ、ポップコーン……映画館、何と恐ろしい場所！？」

「なぜいるんだよお前ら」

なぜか明久に姫路、島田、雄二に霧島が同じ映画館に集結していた。

「なんで雄二は手枷に鎖がついているんだ？」

「坂本くんはなにか悪い事でもしたの？」

見ようによつては完全に囚人である。

「……雄二、どれがみたい？」

「早く自由になりたい」

「……じゃあ、これ」

「……なぜだろう？なんか罪悪感が……」

霧島が指した映画の紹介を見て、なんだか罪悪感が湧いてきた。

「それ3時間24分もあるぞ！？」

「……二回見る」

「1日の授業より長いじゃねえか！！」

「雄二に会えない分の、う・め・あ・わ・せ」

.....。

「……すまん瑠璃」

「……うん。流石に見てられない」

流石幼なじみ、すぐに僕の考えが伝わる。

「霧島」

「……なに？」

「映画ならこれにしておけ」

とある映画の紹介を指す。

「……でも」

「これは恋人同士で観るのが映画館での常識だぞ」

「……恋人^{ボツ}」

「ちよつと待て！？翔子のなに吹き込んでやがる！？」

「さっきの映画二回見るの？」

「……うっ」

ナイス瑠璃。雄二が黙った。

「（雄二）」

「（なんだ？）」

「（これはさっきの埋め合わせだ。霧島がこついつのだとは思わなかった）」

これくらいしか出来ないがしないよりかは、ましだろう。

「明久も同じ映画かよ」

「総司！？いたの！？」

「気づいてなかったのかよ」

大方食費の心配でもしてたのだろう。

「まったく、そろそろ映画始まるから行くぞ」

結局、他の連中を誘導したあと映画を見て（もちろんあいつらとは離れた場所で）、明久の奢りでクレープを食べに行くときに、清水？が襲撃してきて、いろいろグダグダな感じで1日が終わった。

……何しに行ったんだっけ？

秀吉の扱いって本人からしたらいい迷惑だよね（前書き）

日常パートです♪

山本「無意味な♪が気持ち悪い」

酷い！？

秀吉の扱いって本人からしたらいい迷惑だよな

どうも昨日は清水に追い回されてめちゃくちゃ疲れた山本です。

Aクラス戦から一夜あけ、設備は変わらずにあの酷い設備のまんまだ。

「……………総司」

「ん？康太か。おはよう」

「……………おはよう」

「そついえば康太は工藤に勝ったから、命令権があるんだよね？」

「……………ああ」

「なにに使うんだ？子作り？」

「……………！！（ブシャアアアア）」

「康太あああああ！？」

なんとということでしょう！康太が鼻血に染まります（↑わざと）。

「……………大丈夫だ」

「マジで？いろいろマズい状態に見えるぞ？」

「……………この程度どうってことない」

「わかったよ」

康太の命がヤバそうなのでこの話題を打ち切る。

「おっと、ついたな」

「……………雄二のせいで設備が変わらなかった」

「落ちるのを防いだからいいだろ？」

戯れ言を言い合いながら教室を開けたら、

秀吉が着替えていた。

「おはようじゃ、一時間目は体育じゃから着替えるといいぞい」

「……………死してなお悔いなし（ブシヤアアア！）」

「康太ああああ！？死ぬなよ！？男のボクサーパンツで死ぬなよ！？」

ちなみに僕は別に平気だ。秀吉の性格とか実際にツレシヨンで見たから、前のような事はない。

「おはよー……………って、ムツツリーニ！？なんで朝からグロッキーに！？」

「明久か。康太のバックに輸血パックが入っているから取れ！！」

「わかった！」

懸命な蘇生で康太は命をつなぎ止めた。

「秀吉！こんな所で着替えちゃダメだよ！」

「……………いや、秀吉は男だぞ？」

「……………ワシはなにも悪いことはしていないのじゃが……………」

そこで一部始終を見ていた雄二。

「これじゃ、いつかはムツツリーニが死ぬかもしれないな」

確かに！否定できる要素がない！

「この際だからいろいろきめるか……」

ホームルーム

「今回の議題は秀吉の着替える所についてだ」

「木下の着替えを見て、男子が興奮しながら見ているからな」

進行は雄二、板書（チョークすらないのにねえ？）は僕がやることになった。

所でなんか霧島さんが廊下から覗いているのだが？

バツ（雄二が振り向く）

ピシャッ（ドアが閉まる音）

「今、翔子が居なかったか？」

「気のせいだ。声が震えているぞ？」

それはともかく秀吉の事だ。

「女子更衣室でいいんじゃない？」

『そうだな』

『いや、待て！？それだと俺達は秀吉の着替えが見れないぞ！？』
『……それは困るな』

「いや、お前ら秀吉は男だぞ？」

このクラスの秀吉を見る目が気になった。

「ワシは今のままでいいのじゃ」

「しかし、学園がわから苦情がきてな」

「秀吉の着替えのせいで廊下が血塗れになったってね」

「ムツツリーニのせいじゃの……」

「つーわけで、他の意見はないか？」

「……仕方ないの個室トイレで着替えるのじゃ」

「あー、ちょっと待て秀吉。たしか旧校舎に使ってない倉庫があったからそこが使えるようにあとで交渉《脅》してくる」

「なぜか嬉しくないぞい」

「総司なら、秀吉の為の更衣室を確保できるだろ」

「良かったね秀吉！VIP扱いだよ！」

「どっちにしても一人なのじゃ……」

明久、そこは空気読めよ。

係り決めみたいな？（前書き）

山本「作者は秀吉の事をどう思っているんだ？」

天然男殺し

山本「間違っていないな……………」

係り決めみたいな？

「秀吉の件はこれで置いて」

「なにも解決してないのじゃ」

秀吉の扱いはもう変わるわけがないと思うがね？

「次はクラスでの係りでも決めたいと思う。総司板書を頼む」
「はいな。つってもチヨークすらないのにどうやって？」

スッ

なぜか霧島さんがチヨークを手に板書の構えを取る。

「翔子！？ここはFクラスだ（バフッ）」

「霧島、雄二の顔面に黒板消しを当てるな。チヨークの粉がまう」

「……わかった」

「ちよつと待て！？なんで総司はあつさりと翔子を受け入れる！？」

霧島のようなタイプは思い込んだら、融通が効かないタイプだ。

「霧島さんを止めたら」

「止めたら？」

「なぜか文房具を構えているクラスメイトに殺されそうだ」

なぜか板書が霧島に変わったが、まあいいや。

「ちっ、まずはもっとも重労働で汚い美化委員を決めるぞ」
「推薦したい奴とかいる？」

『『吉井君です!!』』

雄二の説明で皆が吉井を生贄に定めた。

「ちよつと!?なんで!?打ち合わせでもしたの!?」

恐らく、思考が被っただけだから打ち合わせなんてしていないだろうがな。

「ていうか美化委員の仕事ってなに？」

「説明がなかったな。美化委員は主にFクラスの備品を直す事だ」

「折れた卓袱台の脚をボンドで直したり、破れた座布団を直したりだな」

「なんだ簡単だね」

ほつとしたように言う明久に小声で雄二が付け足す。

「……あとは掃除当番全部だ」

「無理だよ!？」

「……Fクラスの掃除区域は旧校舎と中庭」

「旧校舎はEクラスを除いた三階すべての部屋と廊下だ」

「わかった引き受けるよ」

明久にしては殊勝な答えだ。

「……………旧校舎には秀吉専用の更衣室がある!」

康太、気付かなくてもいいところに気付くなよ。

『俺も立候補するぞ!』

『ここは掃除のエキスパートと呼ばれた俺が適任だ』

『いや、ここは地獄の掃除人と呼ばれた俺こそがふさわしい』

『いやいや、俺が塵をも残さずピッカピカにしてやるよ』

「翔子、取り敢えず立候補者を書け」

「……わかった」

雄二とアイコンタクトをする。

雄二も同じ事を考えていたようだ。

「じゃ、美化委員は何人いてもいいがその代表を決めるよ?」

「その代表は委員会の集まりとかあるから面倒だけどね?」

『『吉井です!』!』』』

「ん。霧島さんよろしく」

「ちよつと待つてよ!?」

「満場一致で決まったもんは仕方ないだろ?」

「じゃ、美化委員は僕と雄二、姫路、島田、秀吉、康太を除いたFクラスの男子な」

『『『いよつしやあああああ!』!』』』

康太は気付いたか。

「ちなみに秀吉専用更衣室は秀吉が掃除するからお前らははいれないぞ?」

『『『嘘だあああああ!?!?』』』

「む、ワシが掃除するのなの?」

「秀吉しか使わないしな」

「女子にやらせるのは論外だし、このバカ共によらせるのはいろいろ問題だからな」

「むう、確かにの……」

秀吉もバカ共を見て納得してくれた。

「次は副代表を決めるぞ」

「副代表?」

「ああ、副代表は代表が不在の時に代表の代わりができる役割を持つ」

「つまり、ナンバー2だね。代表の代わりっていうのは、試召戦争で代表が休みの時に代表として狙われる役割だね」

この説明を聞いているのかいないのか、Fクラスのメンバーはまだ美化委員を引きずっているのか、だれも言葉を発しない。

「……私がやる」

「Fクラスじゃないからだめ」

霧島さんはわざとやっているのか？

「それって、瑞希じゃダメかしら？」

「いや、それは止めといた方がいい」

「どうしてよ？」

「姫路はFクラスの最大戦力保持者だからだ」

「この副代表は代表と同じように居場所が公開される」

「それがなによ？」

「それはどういうことですか？」

Fクラスの女性陣は察しが悪いな。

「よく考えてみる。姫路のような戦力保持者の居場所がわかることは、試召戦争ではかなりマズい」

「自分はここにいますよ。ってアピールしているようなもんだからな。相手は作戦をたてやすい」

「ああ、なるほど」

「そいうことですか」

通じたようだ。

「できれば戦略をたてられる人物がいい」

「坂本以外で」

「戦略をたてられる人？」

視線が僕に集中する。

……うん。やっぱりこうなるか。

「じゃあ、総司で決まりだな」

「……僕以外に適任者いないのかよ」

そのあとは順当に役職を決めていった。

係り決めみたいな？（後書き）

副代表

山本総司

美化委員

山本・坂本・土屋を除くFクラス男子

木下は秀吉専用更衣室の掃除のため不本意ながら参加

保険委員

土屋・姫路・島田

康太は下心から、島田と姫路は総司の口車に乗せられた。

図書委員

霧島

なぜか私物の管理という役割『雄二の私物の管理は任せて』とのこと

風紀委員

須川ほか美化委員連中（秀吉は不参加）

学級の恋愛を取り締まるらしい。明久は雄二の事が気に入らないため参加。しかし、自分の立場がわかっていないようである。後々面倒な事になりそうだ。

ムツリーニの願い

「今日から担任になった西村だ」

ハロー、山本です。委員決めから一週間がたち、突然だが我がFクラスの担任が鉄人になったらしい。

理由は想像がつくがな。

「鉄人——1つ聞いていいか？」

「なんだ坂本？」

「なぜ突然担任が代わったんだ？」

「坂本周りを見る」

「？」

坂本が周りを見渡すと

なぜか女装をしている秀吉

縛られて覆面集団に囲まれている明久

島田に襲いかかっている清水

ジャンプを読んでいる僕

「なるほど」

「貴様ら——！学校に不必要な物を持つてくるな——！」

「ちよっ！？僕のジャンプが——！」

「先生！これは異端者を処刑するのに必要なんです！」

「返して下さい！」

我ながら、少しずつここに染まってきているような……。

「没収だ！」

僕らの願いは虚しく没収されてしまった。

「クソが読み返しの真っ最中だったつーのに」

「……………カメラを一台没収された」

「ワシはなにも没収されなかったの」

「俺はなににもなかったな」

「鉄人に救われたよ」

「まったくよ」

この一週間でFFF団というのが結成され、なぜか明久が肅正、いや処刑されていた。

ちなみに島田は清水を鉄人に引き剥がされたため、明久はFFF団から助けられたため鉄人に感謝している。

「……………総司」

「なんだ康太？」

「……………例の物は？」

そういえば昨日雑談中に康太に頼まれたものがあつたな。

「あるぞ。放課後にな」

「……………わかった」

放課後——とある空き教室

「これが約束の品だが……自分で作つたらよかったんじゃないか？」
「……………総司の物の方が完成度が高い」
「まあ、いろいろあるからな」

ムツツリーニ、いや康太に渡した物はずばり

ナース服

と

ゴスロリ

である。

「工藤への命令は被写体ね…………。康太らしいな」
「……………照れる」
「あつそ。まだなんかあるのか？」
「……………ある。写真を取る手伝いをしてほしい」
「さっきのこみで二枚」

「……………これ」
「毎度」

夏目さんを受け取る。

うん？別に金はいらないよ？でも無料で使われたくないからな。

「待った〜？」

「おっ、来たな」

「……………！（パシャパシャパシャ）」

なんでこいつは撮影を始めるんだ？

「あれ？君は……………」

「山本総司だ。今回は康太の手伝いだな」

「ふーん？」

「さっそくだか、これに着替えてくれ」

「はい。……………覗くならバレないようにね」

「……………！！」

「落ち着け、じゃ着替え終わったら呼べよ？」

「わかったよ」

隠しカメラを設置しようとするバカを止めつつ、教室をでる。

しばらく待つと中に入っていると、工藤がいい、中に入る。

「ナース服か」

「うん。お注射入りまーす」

「……………！！（ダバダバ）」

「工藤、康太をからかうな。出血多量で死ぬぞ」

テキパキと処置をほどこして、康太を復活させる。

「なるほど。手伝ってこういうことか」

「そうなの？」

「たぶんな。康太写真を撮っていると悪いが、レンズが血に染まっているぞ？」

「……………無念!？」

「この程度で死ぬな。あ、工藤さんもう少し前屈みになって」

「こうかな？」

「そこで笑顔」

「テヘ」

「……………ベストショット!!（パシャパシャパシャパシャパシャ）」

康太の指が見えないほど速く動いているんだが、

「じゃあ、次は——」

「意外にゴスロリが似合うな」

「そうかな？」

「……………かわいい」

あれ？康太が珍しく写真を撮るのも忘れて見惚れいる。

「ムツツリー二君？そんなに見つめられると照れるんだけど」

「……………は！？」

「ムツツリー二君ったら」

……………なんだこの空気。

「帰っていい？」

「……………なぜだ？」

「いや、この甘い雰囲気かな……………」

「え？ボクとムツツリー二君が？それは……………」

工藤が頬を染める。康太はブンブン首を振って、気付いているのを誤魔化している。

僕いないな

「あとは頑張れ」

「……………総司！？」

「あ、じゃあね」

康太（撮る方）と工藤（被写体）か。

意外と相性がいいらしいな。

工藤ノリノリだし、なんかカップルみたいな雰囲気出しやがったし。

ま、友達として成功を——もう成功しているか。

P・S・

次の日、康太が工藤と一緒に帰っているところを発見されたらしく、FFF団に追われていた事を追記しておく。

日常・裏

——いらっしゃい。今日はどんな用かな？

「情報屋、頼みがある」

——男が土下座するなよみっともない。

「恥を忍んで頼む。あいつ等から逃げる方法を教えてくれ！」

——あいつ等っていうのは、君が横流しにした薬の元締めかな？

「そうだ」

——なんでそんな事をしたのかは知らないけど、君も無茶するね。

「いくらだ？いくら払えばいい？」

——いつ捕まるかわからないからって、急かすなよ……。

「……すまない」

——いいよ。で金額だけどこの位でいいかな。

「うっ、で、でも逃げきれんなら安いもんか……」

——はい。契約成立ね。はいこれ。奴さんの索敵地図。

「まだこの町まで来てませんね」

——1時間おきに地図はメールで送ってあげるよ。

「すまねえ」

——じゃ、さようなら。

「ああ、ありがとな」

——感謝される筋合いはないよ。

「そう言う商売だからな」

——いいや、もう出てきていいよ。

「な!？」

——あはは、驚いた? 君が無断で横流しにした薬の組合員だよ。

「てめえ! 騙しやがったな!？」

——騙したとは酷いな。そもそも君、料金踏み倒すつもりだっただろ……話の途中でこいつを気絶させないでよ。

「つい、暴れるもんで」

——まあいいけどな。報酬はきちんと払って貰うよ?

「今、入金したそうです」

——確認したよ。じゃ、またのご利用お待ちしております。

「……その前に一ついいですか？」

——質問によるね。

「なんで山本さんの隠れてろって、いわれた部屋にあれが？」

——ああ、あれ？あれはただの殺し屋だよ。僕の命を狙ってたらしいよ？

「……なぜあんな風に？」

——いや、わりとムカついたから、縛って三角木馬で股を割らせているだけだよ？

「……その割には感じているようですが？」

——媚薬って凄いね？

「殺し屋ならこちらで処分しましょうか？」

——いや、あんなに顔立ちが整っている女の子を君たちに処分させたくはないね。というかもう処分方法は決まっているし。

「そうですか。では」

——まったね。

10分後

——相変わらず時間ぴったりだね。少しは遅刻したら？

「総司さんが抱いてくれるなら構いませんよ？」

——寝言は寝て言え。って、なんで僕の名前知っているんだよ。ああ、言わなくていいから、ウザイな。

「はあ、残念です。ところで今回の品は？」

——そこで股を割られているよ。

「本当ですね。むう、エロい」

——エロ巫女服を着ている君に言われたくないだろうな。

「もとがいいので、高くなりそうですね」

——無視かよ。……そうだその子未経験みたいだよ？

「マニアが喜びそうですね」

——後は君に任せるよ？

「中々の上玉、儲け儲け」

——まったく、一人締めする気なのかな？って聞いてないし。

——あのまま、出て行ったよ。なんで捕まらないんだ？

——ん？電話か。番号は瑠璃のお母さんか。

——もしも『総ちゃん！瑠璃が一人で買い物に行っちゃった！』

——落ち着いて、わかったわかった捜しますから、はい、はい。

——まったく瑠璃め、またかよ……。さっさと捜し出しますか。

日常・裏（後書き）

今回は山本総司の裏の顔を書きました。

山本「情報屋だな」

いつからこんな事していたの？

山本「中学入った頃あたりかな？」

……。

日常・表

今、僕は片っ端から路地裏を見て回っていた。

理由は単純に瑠璃を探すためだ。

……なんで路地裏かつて？

瑠璃は一人歩きをすると、ほぼ百パーセントの確率で厄介ごとに巻き込まれるんだ。

「いつてるそばからこれかよ……」

なぜか不良に囲まれて路地裏の奥に連れ去られそうになっている瑠璃を発見した。

はあ、ちよつと説得してくるか……。

——説得中——

「ふええっ」

「あー、泣くな泣くな」

僕の懸命な説得が通じたのか、不良達はボロボロになって、引いてくれた。真心は通じるものだ。

「これに懲りたら一人で出歩くなよ？」

「グスッグスッ」

「聞いてないし」

瑠璃が直してくれないと、僕が目敵にされるんだよね……。

大抵その時は人外に任せればなんとかなるが。

なんとか瑠璃を落ち着かせて、流れで商店街を見て回ることにした。

「へえ〜。可愛いね♪総ちゃん♪」

「モルモットか。かわいいのか？」

「かわいいよ！」

「そうか……」

かわいいらしいモルモットとかとペットショップで瑠璃が触れ合った後、公園を通りかかったら、

「あ、総司」

「総司か。デートかの？」

「瑠璃ちゃんこんにちは」

「付き合ってたの？」

なぜか明久達とエンカウトした。

「島田、瑠璃とはただの幼なじみだ」

「……幼なじみは手をつないで歩かないわよ？」

「そうでもない」と瑠璃が居なくなるんだ」

「総ちゃん、子供じゃないよ？」

「いや、ちよつと目を離れた隙に不良に絡まったり、誘拐されかかったり、立てこもった犯人の人質になるような奴のためだが？」

「「「……」」」

ドン引きしているし。

個人的に立てこもりした犯人の人質になっていた時が一番面倒だった。

「……あの時は射殺許可とか出ていたからな」

「総司よ。全部声に出とるぞ」

「知ってる。でお前ら何しているの？ダブルデート？」

「違うよ。美波が面白い物に行こうって言ったから」

「……明久。まさか姫路と秀吉も誘ったのか？」

「？うん。そうだけど？」

「……明久お前バカだろ？」

「……吉井君それはない」

島田にはご愁傷様としか言いようがない。

いや。はっきりと二人っきりで行きたいと言わなかった島田にも責任があるのかな？

日常・表（後書き）

感想等、お待ちしております。

山本「オリキャラも小説のアイデアも募集中だ」

デートみたいなもの？

「明久アアアア！！」

なんか雄二が現れて、明久につかみかかった。

「どうした雄二」

「どうしたもこうしたもねえよ！せつかく1日ゆつくり出来るはずだったのにこのバカのせいで！」

「よくわからんが、どうせ明久が霧島にアホなこと吹き込んだんだろ？」

「……雄二。女の子と一緒に遊びに行くなんて許さない」

霧島が殺気を撒き散らしてやってきた。

「翔子！？誤解だ！」

「霧島さん。雄二が誘おうとしているのは霧島さんなんだ！」

「……嬉しい」

「嬉しいなら雄二にスタンガンを押しつけようとするな」

霧島から改造されたっぽいスタンガンを没収する。

「代表そういうときは——」

「……わかった」

「て、おい！なんで肘関節を決めるんだ！」

「代表そうじゃなくて！」

瑠璃が霧島に正しい肘の取り方を教える。

なんで島田と姫路は明久に詰め寄っているんだ？

「あ、アキ！」

「吉井君！」

「……ワシ忘れられとるの」

どうやら、霧島の様子を羨んだ二人が明久に詰め寄っているだけか。

「瑠璃行くぞ？」

「え？う、うん！」

バカ達が騒いでいる間に、霧島への説明が一段落した瑠璃を連れて離脱した。

あのバカ達と一緒にいたらこっちが疲れるわ！

「昼飯はここでいいか」

「ファミレス？」

「ああ、ここでいいよな？」

「うん！」

ファミレスで適当に雑談しながら料理を待っていると、

『僕（私）と吉井君（お姉様）となら』きつと出会えると信じているから……』

……

「ねえ、総ちゃん……」

「なに？」

「あれ……」

「世の中には知らない方がいいことがある。清水の事とか、久保の性癖とか」

つか、久保。清水は兎も角なぜファミレスでスタンバっているんだよ？

デートみたいなもの？（後書き）

次はラブレター騒動でも起こして、清涼祭編に入ります。

ラブレター騒動1

「——というわけじゃ」

「なるほど、あの後久保と清水にねえ」

ヤッホー。山本君だよ？

秀吉の話だと、あの後に久保と清水に出逢って、久保は明久の台詞で叫びながら退場し、清水は四人（主に明久と島田）を追いかけてしまったらしい。

「あ、明久が来たな」

「雄二も一緒じゃの」

本鈴とともに鉄人が教室に入って来て、会話はそれにて中断となった。

……雄二がニヤニヤしているのが気にかかる。

「工藤」「はい」「久保」「はい」「近藤」「はい」

毎朝恒例の出席確認にクラスメイトはダルそうに返事をしていた。

「坂本」「……………明久がラブレターを貰ったようだ」

『『殺せええっ!!』』』

このクラスの団結力が僕は嫌いです。

「雄二！いきなりなんてことを言い出すのさ！」

「つか、小声だったのによく聞こえたな？」

「それだけ飢えとるのじゃろう……」

『吉井がそんなもの貰うとはどういうことだ!?!』

『自分の席を探せ！吉井が貰うなら俺達にもあるはずだ!』

『ダメだ！腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない!』

『もつとよく探せ!』

『……あつた！未開封のパンだ!』

『畜生!!』

みんなが自分の席を漁るがお前らにラブレターなんてあり得んな。

一人に至ってはなにを探しているんだ？

「お前ら！静かにしろ！」

流石鉄人。一喝して黙らした。

「出欠確認を続ける。手塚」「吉井コロス」「藤堂」「吉井コロス」

「戸沢」「吉井コロス」

「皆落ち着くんだ！返事が『吉井コロス』になっているよ!?!」

「吉井、静かにしろ！」

「鉄人そこは注意する場所が違うと思いますよ?」

「総司の言う通りだよ！このままだとクラスメイトは僕に暴行を加えますよ！？」

「新田」「吉井コロス」「布田」「吉井ぶち殺す」「根岸」「吉井マジ殺す」

明久がなんか絶望的な顔を始めたな。

「山本」「……そういえば昨日明久はハーレム状態で買い物してたな」

『『殺せええええええええつ！！』『』』

「総司！？」

「すまん明久（笑）」

「謝るつもりないよね！？」

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も1日勉強に励むように」

出席簿を閉じ、教室を後にしようとする鉄人

「待つて先生！行かないで！可愛い生徒を見殺しにしないで！」

「吉井、間違えるな」

「間違い？」

「お前は不細工だ」

「不細工とまで言われるとは思わなかったよバカ！」

「授業は真面目に受けるように」

「先生待つて！」

明久の叫びも空しく、Fクラス最大抑止力がなくなった。

「総司！一体なんで僕を見捨てたんだ！？」

「いや、面白そうだったからつい」

「つい。じゃない!!」

「じゃあ、ザマア」

「ザマアでも「アキ、ちよゝつと話を聞かせて貰える?」

島田が般若の表情で明久に詰め寄る。

「あ!!」

「?」

明久が叫んで島田の後ろを指すと島田がそつちを見て、明久が逃げ出した。

『逃がすな!これより異端審問会を開始する!』

『『異端者には死の鉄槌を!!』』

このクラスヤツパリおかしいよな(笑)

ラブレター騒動1（後書き）

感想とかお待ちしております

ラブレター騒動2

ハイハイ。山本君です。僕は今Bクラスにいます理由は……

『いたか！？』

『異端者の吉井・坂本・山本は未だ捕獲できておりません！』

『異端者め……！休日に関女とデートとはうらや——いい度胸だな。異端者は捕まえて血祭りにあげる……！』

『『はっ！須川会長……！』』

というわけだ。

ちなみに明久は校内を追いかけてまわされていて、雄二は逃げている途中で霧島に捕まったばい。

「すまんなクロ」

「気にすんな。あのバカ達に見つからないようにBクラスは協力する」

「クロは副代表じゃないんだろ？」

「別に構わないよ。あのクソよりかは数億ました」

「アレと比べるなよ……」

教室の隅の席で誰からも無視されているのは、代表の根元だ。

僕達がAクラスと一騎打ちしている間のCクラス戦で負け（と言ってもBクラスが小山に同情し明け渡した感じが強いが……）、さらにDクラス戦では口車で代表に戻ったはいいいが浅はかな策で敗退し、S級戦犯として実質的な代表の地位すら失った。

「そついや、副代表って誰？」

「……………まだ決まってるない」

「はい？」

「決まってるないの！？」

「ああ」

「立候補とかいないの？」

「正直このクラスを引っ張れる奴はいるがその座をかけて争っている真っ最中」

「僕が居ていいのか？」「構わないよ。総司がこのクラスを覇にしていると思われるだけで、牽制になるしな」

「……………」

僕の扱いは抑止力か？

ラブレター騒動2（後書き）

その後鉄人によって、異端審問会員は全員補習室に連行され、明久はなぜか雄二に手紙を燃やされたらしい。

姫路が『私が書いた手紙』という言葉から、差出人特定（知るのは雄二・姫路・僕）

明久は召喚獣を悪用したらしく、鉄人に連行された。

オリキャラ募集します。

Bクラスの戦略家

Cクラスの清水に匹敵するキャラ

Eクラスの部活バカ

を募集します。

感想と共にどんどん送って下さい！

学園祭編開始

桜ももう姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの時期。

文月学園では『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

教室を改造し始めるクラス、調理道具を手配するクラス、『試験召喚システム』の展示の準備をするクラス。

学園祭の準備の為のLHRはどのクラスも活気が溢れている。

「吉井！こいつ！」

「勝負だ須川君！」

「お前の球など場外に飛ばしてやる！」

「言っただな！？」

なんの準備もせずに、校庭で野球をしていた。

「なんで僕も巻き込まれてるんだろ……」

たしかLHRの時間に寝ようとしていたら、雄二が野球の提案をして……。もういいや。

サイドで突っ立っていると、キャッチャーの雄二のサインをみる。

雄二のサイン

『カーブをバッターの頭に』

先日の恨みを晴らす為のデッドボールだな。カーブを使う意味があ

るのか？

霧島のサイン

『雄二の股間にストレート』

うん。なぜそこにいるんだ霧島？明久も頷くな。

「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！」

「ヤバい！鉄人だ！」

「見ての通り野球ですが？」

怒髪天をつく勢いで担任の鉄人先生が校舎から飛び出して来た。

流石にトライアスロンを趣味としているせいか足速いな。

「吉井！貴様がサボリの主犯か！」

「違います！どうしていつも僕を目の仇にするんですか！」

「日頃の行いが悪いからだろ？」

完全に明久にロックオンしているな。

鉄人も問題があったときに明久がいたら、明久のせいだという法則でも成り立っているのかもしれない。

ちなみに僕は先生方には、普通の生徒という印象を与えているから、目を付けられることはまずない。

「雄二が野球を提案したんです！」

ん？雄二が視線でなんか言っているな。

『フォークを鉄人の股間に』

いやだから、変化球にする意味あるの？それ？

「違う！今は球種にコースを求めているんじゃない！だいたいそれをやったら単に僕が怒られるだけだよな！？」

ごもつとも（笑）

「全員教室に戻れ！この時期になっても出し物が決まっていらないんで、うちのクラスだけだぞ！」

「鉄人先生声デカいな」

鉄人の恫喝が響き、バカ達は小汚い教室に連れ戻された。

学園祭編開始（後書き）

まだまだオリキャラ募集します。

Bクラスの戦略家

Cクラスの清水に匹敵するキャラ

Eクラスの部活バカ

を募集します。

感想と共にどんどん送って下さい！

会議は踊るみたいなの？

「そろそろ学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなきゃいけない時期がきたんだが――」

「雄二面倒なのはわかるがしつかりしろ」

一応クラス代表だからきっちり締めるだろ。

「とりあえず、議長進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、あとは任せた」

「心の底からどうでもいいのがよくわかるな」

こいつに期待した僕がバカだった。

雄二がさっさと自分の席について寝始めた。

「はあ、じゃあ実行委員を決めるぞ。誰か推薦しろ」

「誰がいい？」

「山本でいいんじゃないか？」

「いや、それだとその気にこのクラスを牛耳る可能性があるぞ」

「お前ら、僕の事なんだと思っているんだ？」

場合によっては殲滅も仕方がない。

「意外に島田なんてどうだ？」

「意外に纏めるのはうまそうだな」

「ああ、年下にお姉様と呼ばれてるしな」

最後のは関係ないだろ。

「じゃあ、実行委員は島田でいいか？」

「え？ウチ？うーん……、ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」

「召喚大会？シングルマッチか？」

「タッグマッチよ」

召喚大会ってのは学園祭に行われる召喚獣どうしのトーナメント試合で学園の宣伝の一環だ。

一応、シングルマッチとタッグマッチの二つがある。

「総司。実行委員なら、美波より姫路さんの方が適任じゃないの？」

「え？私ですか？」

明久の声に明久の隣にいた姫路が声を上げる。

姫路は明久にアタックしていたところかな？

「姫路には無理だ。少数意見の切り捨てを姫路が出来るとは思えないな」

「なら、総司がしたら？」

「別に構わな「ふざけるな！山本に仕切らせたらこのクラスから平穏が無くなるじゃないか！」……だそうだ。お前あとで人のいないところにこい」

ちょっと、お仕置が必要かな？

「つーわけで、島田ね。サポートに明久をつけてやろう」
「わかったわ」

「総司！？なに勝手に決めてるの！？」

「うるさいぞ。実行委員は島田と明久に決定。拍手ー」

.....パチ.....パチ.....

「なにこのやる気のない拍手！？」

「ほらほらアキってば。ウチとアンタに決まったんだから、前に出て議事をやらないと」

「なんだか僕はいつも貧乏クジを引かされているよ.....」

いつもの事だろ。

「あとは任せた」

「総司どこ行くの？」

「トイレ」

明久に任せてたら多分面白いことになっていそうだからな。

教室を出て用をすませに行く。

会議は踊るみたいな？（後書き）

オリキャラ募集します。

Bクラスの副代表

Cクラスの清水に匹敵するキャラ

Eクラスの部活バカ
を募集します。

感想と共にどんどん送って下さい！

現在のオリキャラ案？はどごの根性論者の第七位『ナンバーセブ
ン』だけなので、真面目にオリキャラが必要です。

よろしくお願いします。

明久って、なんなの？

「あ、鉄人先生」

「西村先生と呼べ」

キジを撃ちに行った帰りに鉄人先生にエンカウトした。

「なぜ廊下をうろついていたんだ？」

「ちよつとトイレにね」

「そうか。山本お前だけはこのクラスに染まるなよ」

そう言ってから、教室の扉を開けた。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補は黒板にある3つです」

島田の声に鉄人先生はゆっくりと黒板に目をやる間にさっさと教室にはいる。

やれやれ。えっと、候補は？

【写真館『秘密の覗き部屋』】

これは康太の案だな。こんなのをどうどう言うのはあいつくらいだろう。

【ウェディング喫茶『人生の墓場』】

結婚は人生の墓場ともいうが、流石にそれはないな。客を集める気

がないだろ。

【中華喫茶『ヨーロッパ』】

中華なの？それともヨーロッパ？

「……補習の時間を倍にした方が良いかもしれんな」
「流石にこれはフォローできんな」

鉄人先生の言葉に相槌をうつと、バカ達が騒ぎ始めた。

「先生！それは違うんです！」

「吉井が勝手に書いたんです！」

「僕らがバカなわけじゃありません！」

このクラスの明久の立ち位置がよくわかるね。

「馬鹿者！みつともない言い訳をするな！先生は、バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言っているんだ！」

「同級生だったらシバいているところだ」

「小声で言ったつもりかもしれないが普通に聞こえているぞ？」

明久はバカだな。

「まったくお前らは……。稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そう言った気持ちすらないのか？」

「え？それっていいの？」

「きちんと学園長に許可を取ったらな」

いいんだ……。まあ、あの学園長を頷かせるのは至難の技だな。

「み、皆さん！頑張りましょう！」

姫路が珍しく大声をだした。そのせいでクラスの男子に火がついたように騒ぎになっていく。

……鉄人先生は呆れて去っていくなよ。一応担任だろ？

「うるさいな……」

「山本！これ鎮められない？」

「出来るぞ」

「頼むわ！」

懷から爆弾を取り出し――

――しばらくお待ちください――

「じゃあ、最初の3つで多数決をとるわ」

「クラスの男子がほぼアフロってあれだよね？」

「あんたのせいでしょうが。……じゃあ、写真館の人は手を挙げて

！はい、次はウェディング喫茶！最後は中華喫茶！」

1・1・7の割合だな。

「中華喫茶に決定！」

「じゃあ、次はホールと厨房に別れて貰うか」

「そうね。中華料理を作るのは誰か居る？」

康太と須川が立ち上がったので、厨房はその二人がリーダーになり、ホールは明久と僕がリーダーになった。

その後は、明久が島田を怒らせて殴られたり、姫路が厨房に行こうとしたのを明久が止めて、言葉のチヨイスで島田に殴られたり、秀吉をホールにしようとして島田を怒らせて殴られたりした。

……………明久、少しは学習しろよ。

それはない

「アキ、山本ちよつといい?」

帰りのHRも終わり放課後。帰ろうとしたら、島田に呼び止められた。

「なんだ島田?」

「何か用?」

「用って言うか相談なんだけど?」

「とうとう告白か?」

「そうなの!? よくわからないけど応援するよ!」

「違うわよ!? アキのバカ!!」

「グヘッ!?!」

僕の冗談に明久が真に受けて、島田に殴り飛ばされた。

「ウチの告白じゃなくて坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないか聞こうとしただけよ!?!」

「落ち着け島田。片思い中の明久が死ぬぞ」

「な／＼／」

カマを掛けたらすぐに引つかかった。

「ケホツケホツ。……たぶん無理だよ。雄二は興味の無い事には徹底的に無関心だからね」

「付き合いの短い僕でもわかるな」

恐らくクラスの出し物すら知らない可能性がたかい。

「でも、アキが頼めばきつと動いてくれるよね？」

「それはないな」

「え？別に僕の頼みでも雄二の返事は変わらないと思うけど」

「うっん、そんなこと無いだって——」

なんたる僕空気がハンパない。

「だってアンタ達愛し合って居るんでしょ！」

「もう僕お嬢に行けない！」

「嬢に行くつもりだったのか？」

そう言えば、入学してからそんな噂が流れたような？

「誰が雄二なんかと！だったら僕は断然秀吉の方がいいよ！」

「……あ、明久？」

「気持ちはわかるが落ち着け明久秀吉」

明久のカミングアウトに帰ろうとしていた秀吉の動きが止まる。

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんな事を言われても、ワシらには色々障害があると思うのじゃ。その、ほら、歳の差とか……」

「違うんだ秀吉！誤解だよ！あと僕らの間にある障害は決して歳の差じゃないと思う」

秀吉が顔を赤らめて俯く。

明久はそれをみてハートを撃ち抜かれかけているな（笑）

「秀吉が女つぽくなってきたな（笑）」

「笑い事じゃないよ!？」

いいえ、他人事です。

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「そうなるね」

「なんとかできないの？このままじゃ喫茶店が失敗に終わるような……」

……別に失敗してもいいんじゃない？そこまで重要じゃないし

「ところでお主らは何の話をしておるのじゃ？」

「深刻って程じゃないけ」「アキ、本当に深刻な話なのよ……」ほえ
「？」

深刻？学園祭の出し物程度で？

「本人には言わないでって言われているけど……。一応秘密の話だからね？」

「うん、わかった」

「話によるな」

さて、どんなはなしかな？

「実は瑞希なんだけど、転校するかもしれないの」

「ほえ？」

「まあ、妥当だな」

あ、明久が処理落ちしかけてる。

「このバカ！不測の事態に弱いんだから！」

「明久、目をさますのじゃ！」

秀吉が明久の肩を揺すり、明久を呼び戻す。

「秀吉……。モヒカンになった僕でも、好きでいてくれるかい？」

「明久、姫路がいなくなったら秀吉の取り合いでクラスメイトが不良になって、某世紀末救世主の脇役みたいな髪型になるわけないからな？」

「……よくわかったわね？」

「いや、ただの勘」

それはない（後書き）

オリキャラ募集します。

Bクラスの副代表

Cクラスの清水に匹敵するようなキャラ

Eクラスの部活バカ
を募集します。

感想と共にどんどん送って下さい！

山本「あなたのオリキャラがバカヤクにでるよ！」

読まなくていいよ

ハローハロー山本です。

今は明久が雄二を引つ張り出す為の策を実行して、秀吉に霧島の物真似をさせたところです。詳しくは原作で。

「……さつきから、女子更衣室でバカコンビが発見されたっていうメールが来るな」

「なんでそんな情報が回ってくるのじゃ？」

「いや、おしゃべりな女子と仲良くなったら、自然とそういう噂が集まってくるぞ？」

「……そういうものかのう？」

そういうものです。

「しかし、なぜ女子更衣室？」

「大方、雄二が霧島から逃げるために入ったのじゃろう」

雄二もいい加減に諦めればいいのに。

「……ところでなんで島田は女子更衣室で見つかったという噂に殺気立っているんだ？」

「……嫉妬かのう？」

……たしか、明久と島田はクラスメイトまたは友人というカテゴリーズされるはずだ。

嫉妬するような関係じゃないだろう？

読まなくていいよ(後書き)

オリキャラはとりあえず12月31日23時59分までとします。

今年いっぱいなのでマジで送ってきて下さい

謹賀新年スペシャル〜オリキャラ座談会〜（前書き）

この話は時空列的には存在しないことにしておいて下さい。

謹賀新年スペシャル〜オリキャラ座談会〜

山本「おいちよつと待て」

川端「どうしたの総ちゃん？」

山本「どうしたもこうしたもなぜいきなり座談会？」

川端「えつと、『こうでもしとかないとオリキャラの存在が薄くなるから』だって」

山本「なんで瑠璃が言うんだ？」

川端「ここにいたら、総ちゃんに殴り飛ばされそうだからだって」

山本「あの野郎逃げやがったな……っ！」

蔵石「落ち着け総司」

草薙「そうだぞ！落ち着いてから俺と勝負だ！」

山本「しねーよ。クロと剣か……。なんでいるの？」

草薙・蔵石「作者に呼ばれた」

山本「一応、オリキャラだったな」

蔵石「で、何を話すの？」

川端「えーと、『あなた達から見た原作キャラの印象を教えてください』だって」

山本「する意味あるのか？まあいいや。明久は玩具で雄二は策士だがわりと抜けている。康太はスケベ。秀吉は……なんていえばいいんだ？」

蔵石「俺もなんていえないのかわかんないな。俺はまずFクラスでは吉井はまっすぐな奴で、姫路は頭がいくらいしか知らないな……。自分のクラスの原作キャラは根本と岩下と菊入くらいしか出てないな……」

草薙「根本はともかく、岩下と菊入とは誰だ！」

山本「五月蠅い。騒ぐな」

川端「えっと、岩下さんと菊入さんは原作の1・2巻でやられキャラになっていた人だね」

蔵石「川端さん。事実でも言っちゃダメだと思う」

川端「はう」

山本「気にしないでいいぞ瑠璃。次、剣」

草薙「おお！吉井はあの召喚獣の操作は凄かったぞ！工藤の腕輪も良かったが土屋の腕輪も凄かったな！木下姉妹はなぜあんなに性格が違うのかが気になったな！」

山本「ほぼ召喚獣の話じゃねえか！あと木下『姉妹』じゃなくて木

下『姉弟』な」

草薙「む！？優子は男なのか！？」

蔵石「いや、Fクラスの方ね」

山本「コイツにデリカシーとか言う物はないのか？」

蔵石「ないと思う」

山本「だな。じゃ、次は瑠璃の番ね」

川端「うん。工藤さんは言動はアレだけど面度見はいいし、優子は頼りになるね。代表は……」

山本「無理にコメントしなくていいぞ？」

川端「……ごめんなさい」

蔵石「川端さんが謝ることじゃないよ」

草薙「代表はかなり特殊だからな！」

山本「お前には言われたくないな……」

蔵石「そう言えば作者ってこの後の展開とかちゃんと考えているの？」

川端「『一応、考えている。原作をベースにするつもりだけどオリジナルで大きくズレるかもしれない』」

山本「要するに作者の行き当たりばったりと言っわけだな……」

蔵石「なんで書き始めたんだアレ？」

草薙「不明だ！強いて言うなら暇つぶしだろうな！」

川端・蔵石・山本「あー」

川端「『酷くない！？』だって」

草薙「だって作者だからな！」

山本「まあ、こんな感じでグダグダだけどバカヤクを」

一同「『今年もよろしくお願いします』」

作者「この後の展開に御期待願いたい！」

山本「居たのか！？あとそんなにハードル上げて大丈夫なのか！？」

作者「……………大丈夫さきつと、たぶん（ダラダラ）」

一同「『（激しく不安だ！）』』』』」

投稿キャラ決定（前書き）

どうも、正月初日に熱でぶっ倒れた作者です。

山本「新年早々風邪でもひいたのか？」

知らね。俺の見立てじゃ一年の疲れがその日に襲って来たような感覚だったぞ？

山本「……（突っ込んだら面倒そうだな）で今回は投稿キャラの発表か」

あれ？スルー？

山本「五月蠅い馬鹿作者」

酷くない！？

山本「作者が部屋の隅で落ち込んでいるっぽいので紹介開始」

投稿キャラ決定

Bクラス

神城 翔太 かみしろ
しょうた

顔

しっかりイケメン

性格

チャラい感じで女好き。しかし、内心では物事をしっかり考えていたり、人のことを考えて行動するひと。口が上手い

好き

友達、女の子

嫌い

根本みたいな卑怯者

趣味

ナンパ（携帯には女の子の名前だらけ）

苦手 鉄人

作者が書かないタイプの為経験になりそうな為採用。

あまつぎ
天月 空 そら

顔

黒髪美人和服が似合う十中八人位が振り向くかんじ

性格

ダウンー、無口、純粹、常識というネジがかなり抜けている天然さん

好き

美味しいお茶、アイスクリーム、和菓子、がんばる人、子供

嫌い

うるさい人、暑苦しい人、辛いもの

趣味

料理（超絶品＋和洋折衷何でもござれ）、人間観察（じっと見つめて
いるだけ）

苦手 会話、辛い食べ物、犬怖い

作者が個人的に気に入ったキャラです。神城君と絡ませたら面白そう
ですね（笑）

Cクラス

ほしかわ
星川 聖 ひじり

顔

かなり可愛い

十人中七人振り向くかんじ

好き

猫、犬、木下秀吉

嫌い

吉井明久

趣味

秀吉の観察もといストーカー

作者の無茶ぶりのような募集条件に付いてきたキャラです（笑）。個人的には清水さんと組ませたら面白（収集がつかなくなり）そうですね（笑）

Eクラス

山村勝やまむら しょう

バスケ部、身長194cmでバカでかい。

部活に打ち込んでるせいで成績はよくない（文系はFクラス並み）が、化学のみBクラスレベル。

スポーツ馬鹿ですね。設定的にはバスケを止めたらCクラス並みという感じですかね？個人的には蔵石君並に使い勝手は良さそうです（笑）

橋本 雅 はしもと みやび

顔

可愛いつり目 十人中六人振り向く

好き

ソフトボール、野球

嫌い

勉強

性格

人類皆兄弟な感じを疑わない人、花より運動常に動いている

その他

下ネタは苦手、色恋にも疎い

この娘は弄られキャラになりそうな予感がしますね（笑）姫路さんとは相性が良さそうですね

投稿キャラ決定（後書き）

投稿してくれた黒炉さん A C S さんありがとうございました。

山本「投稿してきたのが二人って……」

正確には五人いたが、どこその都市の第七位や工藤に似たキャラとかいう漠然としたものが送られてきたからな。

山本「丸かぶりか？」

ならまだ選ぶ余地が有ったが、とあるの第七位みたいなのか、工藤に似たキャラを出して下さいとか、こっちに丸投げされたんだよね（笑）

山本「……………ハハ」

既存のキャラに似せてとか言うのが一番困りますね。下手すればキャラの盗作とかで面倒な事になりますし、性格とか考えるの面倒だし……

山本「つーわけで伝わったかどうかは激しく不安だがそういうのは作者に丸投げはしないように」

投稿キャラは学園祭の序盤が終わったあたりで出す予定ですの、今後もバカヤクをよろしく願います！

問題は山積みだよ……（前書き）

投稿キャラはいつ出るかはハッキリとは決まっていません。

なのでかなり遅れるかもしれないので悪しからず。

問題は山積みだよ……

「そうか。姫路の転校か……」

帰ってきた明久を島田がたこ殴りにするのを横目に雄二に状況説明をしたところだ。

「そうになると、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

「あー、雄二もそう思う？」

「不十分だと？どうしてじゃ？」

明久を介抱していた秀吉が聞いてくる。

「秀吉。教室と我がFクラスメイトを思い出せ」

「むう？……………わからないのじゃ」

わからないのかい。

「姫路の父親が転校を進めた要因は恐らく3つ」

そう言って、雄二は指を三本立てて見せた。

「まず一つ目。ボロボロの卓袱台に腐った畳という貧相な設備」

「快適な学習環境とは言い難いしな、これは喫茶店が成功すればなんとかなるな」

「ああ。二つ目は、老朽化した教室」

「この教室は身体の弱い生徒には毒と等しいからな」

そこでやっと復活したらしい明久が口を挟む。

「一つ目は道具で、二つ目は教室自体ってこと？」

「そういうこと。喫茶店の利益じゃまず無理だね」

「業者を手配したり、その間の教室の確保など学校側の協力が不可欠だからな」

「そうだねー？勝手にやるのはいいけどいろいろ面倒な手続きとかがあるからね。学校に押し付けるのがベストかな？」

「最後の三つ目。レベルの低いクラスメイト。姫路の成長を促すことのできない学習環境という面だ」

「あとはこのクラスの雰囲気、姫路さんが吞まれかけてることもあるかな？」

「吞まれかけてる？」

あれ？明久が首を傾げている。

「なに首を傾げているんだ明久？」

「姫路さんがこのクラスの雰囲気、吞まれいたっけ？」

「……一年の時、姫路は異端審問会があることに違和感を感じるはずだぞ？」

他にもラブレター騒動の時も明久に危害を加えることが前提だったしな。

「しかし問題だらけじゃのう。一つ目はともかく、二つ目三つ目は難しいのう」

「そうでもないさ。三つ目の方は既に姫路と島田で対策を練っているんだろ？」

島田の答えは妹にねだられた姉のような顔をしながら対策はあるとのこと。

「召喚大会ね。シングルの方は僕がでるか、優勝とは行かなくても上位には確実に入るし」

「凄い自信じゃのう」

当たり前だ。よほどの相手じゃ無い限りかなうわけがない。

「で、坂本。二つ目はどうするの？」

「どうするもなにも、学園長に直訴したらいいだけだろ？」

「まあ、妥当だな」

頷き合う僕達に明久が不思議そうに聞く。

「それだけ？僕らが学園長に言っただけで何とかしてくれるかな？」

「あのな。ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？」

「方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼす状況の教室の改善要求を突っぱねたら、マスコミ等に叩かれるぞ」

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ。思い立ったが仏滅っていうしね！」

それを言うなら『吉日』だ。

しかし、優しい僕達は突っ込まない。

「そうと決まれば、学園長室に乗り込むか。秀吉と島田は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ」

「鉄人先生を見かけたら僕達は帰ったと言っておいて」

「うむ。了解じゃ」

「アキ、しっかりやってきなさいよ」

「OK。任せといてよ」

「ああ。交渉は僕と雄二がするから問題ない」

「それなら安心ね」

「……僕の活躍は？」

たぶんない。きつとない（笑）

学園長室に学園長が現れた（笑）

『……商品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランド……』

新校舎の一角にある学園長室の前に来ると、誰かが言い争っている声が聞こえる。

片方は学園長としてもう片方は？

「どうした、明久、総司」

「ん、なんでもない」

「いや、中で何か話しているみたいんだけど」

明久が珍しくマトモな事を言っている気がする。

「そうか。つまり中には学園長がいると言うわけだな。無駄足にならなくて何よりだ」

「そうだねー。さつさと入りますか」

「そっか、じゃあ失礼しまーす！」

学園長室のドアをノックして、僕と雄二に明久は中にずんずん入っていった。

ちなみに僕はこの二人の一步分後ろをついて行く。

学園長の（僕への）心証を和らげるためだ。

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

この二人が守るわけ無いだろ。そんな一般常識。

長い白髪が特徴の藤堂カヲル学園長だ。一応、召喚システム開発の中心人物である。最初の発言からして間違いナシに教育者ではない。

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。……まさかあなたの差し金ですか？」

眼鏡を弄りながら学園長を睨みつける竹原教頭だ。こいつは雰囲気からして小物だな。

「馬鹿を言わないでくれ。どうしてこのアタシがそんなセコイ手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるわけでも無いのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意なようですから」

仮にも教育者が生徒の前で言い争うなよ。

「さつきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「……そうですか。この場はそういうことにしておきましょう。それでは失礼させて頂きます」

教頭は一瞬部屋の隅に視線を送り、踵を返して出て行った。

無意識ぽかったから、盗聴器でも仕込んであんなのかな？

……どうでもいいか。

「んでガキども。アンタらは何の用だい？」

「アンタ本当に教育者？」

僕の疑問は黙殺された。

「今日は学園長にお話があったて来ました」

明久。雄二が敬語使ってるくらいで驚くな。

「私は今そころじゃ無いんでね。学園の経営に関する事なら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀ってモンだ。覚えておきな」

このババア殴ろうかな？

「失礼しました。俺は二年Fクラス代表の坂本雄二」

「副代表の山本総司だよー」

「それでこっちが二年を代表するバカです」

その紹介でつたわるか？

「ほう……。そうかい。アンタ達がFクラスの坂本と山本に吉井かい」

「ちよつと待つて学園長！僕はまだ名前を言ってますんよね！？」

「つまり、それだけバカという言葉に縁があるってことだな」

「総司！？なんで納得しているの！？ここはフォーローをいれてよ！」

嫌だよ面倒臭い。

学園長室に学園長が現れた（笑）（後書き）

うーん。余り文章が……

総司もキャラがブレてるし……。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1263y/>

バカとテストと疫病神

2012年1月14日23時49分発行